

アジア女性基金公開フォーラムの記録

日韓関係の 現在・過去・未来

—新時代に生きる私たちの対話—

学生・大学院生

韓国：関東大学校・西江大学校国際大学院

日本：中央大学・東海大学・杏林大学・

津田塾大学・明治大学・早稲田大学

留学生：早稲田大学（韓国）

アドバイザー

李元雄＋横田洋三＋饗庭孝典＋伊勢桃代

来日した韓国の学生と日本の学生が語り合うセッション。

「慰安婦」問題と日韓関係～私たちはこうみる

日韓関係の現状～私たちはこう変える

2003年7月1日 国際連合大学（東京・青山）

主催 財団法人女性のためのアジア平和国民基金・

国際連合大学

後援 外務省



財団法人 女性のためのアジア平和国民基金
（アジア女性基金）

アジア女性基金が実施してきた「慰安婦」とされた方々への償いの事業は、関係各国でさまざまな反響を呼び、議論百出した。市民活動などを通して問題が浮上し、改めてそれを国家的に（政府と国民が）取り上げて対処することは稀有で大きな出来事なのだが、元「慰安婦」へ国が個人賠償をせよという主張と、「基金」による償い事業を現実的に実行したことがあたかも対立する構図となった。（やがて問題ですらないとする論調も現れた。）

この日韓学生によるフォーラムは、「基金」の償い事業をめぐる議論を学生たちがどう受け止めるかを一つのテーマとした。つぎに、日韓の間のいわゆる過去・歴史問題をどのように見て、これからどうするべきかをテーマにした。

討論・対話するのは現在、場はこのフォーラム。サッカーのW杯共催をはじめ、音楽・映画・アニメなど相互にもつ興味と関心、体験をもとにして、対話しようとした。何となく受け継がれてきた対決姿勢でなく、いまを生きる学生として、過去・歴史問題のこれまでの扱い方、議論の仕方そのものを、それぞれの実感や体験をもとに検証する試みでもあった。（あえて主題を「日韓関係の現在・過去・未来」とした。）

相手に関心をもち、理解しようと対話することがはじまりで、会えば息遣いも表情も感じられる。ことばを超えたつき合いのはじまりとなった。

《日韓学生のフォーラム》

日韓関係の現在・過去・未来～新時代に生きる私たちの対話～

JAPAN-KOREA STUDENTS' FORUM IN TOKYO, 2003

日本と韓国の学生が集まり、現在の互いへの関心、興味、体験をもとに、
「慰安婦」問題など過去の関係を語り合い、
それぞれがどのように未来をつくっていくかについて対話――。

韓国の学生：関東大学校、西江大学校国際大学院

日本の学生：中央大学、東海大学、津田塾大学、
明治大学、杏林大学、早稲田大学

留学生：早稲田大学大学院

2003年7月1日（火）

午前の部

9：00～12：00 韓国—日本（中央大学）

午後の部

13：30～17：00 韓国—日本

国連大学エリザベス・ローズ会議場

韓国語—日本語：逐語・同時通訳

主催：財団法人女性のためのアジア平和国民基金
（アジア女性基金）

国際連合大学

後援：外務省

韓国：

関東大學校

KWANDONG UNIVERSITY

＝大韓民國江原道江陵市。1955年開校、ミッション系私立大学。

1988年に総合大学。学生・大学院生約9000人

西江大學校國際大學院

SOGANG GRADUATE SCHOOL OF INTERNATIONAL STUDIES (SGIS)

＝韓國ソウル特別市麻浦區。1960年設立、カトリック・イエズス会、私立。

学生・大学院生10000人余。上智大学は姉妹校

留学生（韓国、早稲田大学大学院）

日本：

中央大学

東海大学

津田塾大学

明治大学

杏林大学

早稲田大学

* 各私立大学

目次 CONTENTS

日韓学生のフォーラム

日韓関係の現在・過去・未来～新時代に生きる私たちの対話

午前の部 …… 1

日韓関係の現在・過去・未来

(韓国——日本・中央大学)

午後の部 …… 34

セッション1——「慰安婦」問題と日韓関係～私たちは、こうみる

▽「慰安婦」被害者とアジア女性基金

▽政府と市民・NGOの役割

セッション2——日韓関係の現状～私たちは、こう変える

▽韓国の中の日本現象、日本の中の韓国現象—なにが変わろうとしているか

▽歴史・過去問題と日韓関係—その要素と変えるべきこと

▽これからの私たちの課題

学生のレポート ……103

フォーラム前

フォーラム後

フォーラム参加者のアンケート ……138

《日韓学生のフォーラム》

日韓関係の現在・過去・未来

～新時代に生きる私たちの対話～

【午前の部】

韓国：

関東大學校 KWANDONG UNIVERSITY

西江大學校國際大學院 SOGANG GRADUATE SCHOOL OF INTERNATIONAL STUDIES (SGIS)

日本：

中央大学

パネリスト：

韓国：(学科名の北韓は北朝鮮とした)

関東大學校 (KU)

ユ・ジェヨン YU JAE YONG 北朝鮮(北韓) 学科

イム・スミン LIM SOO MIN 北朝鮮学科

イー・ジウォン LEE JEE WON 北朝鮮学科

チョン・ミエ JUN MEE AE 日本語学科

ソ・ナムヒ SEO NAM HEE 行政学科

イー・キョンファ LEE KYUNG HWA 行政学科

ソン・ウギョン SONG WOO KYUNG 行政学科

チョン・ Cholク JUN CHUL UK 北朝鮮学科

チェ・シンジュ CHOI SIN JU 北朝鮮学科

キム・ヒョンウ KIM HYUNG WOO 北朝鮮学科

西江大學校國際大學院 (SGIS)

シン・ジョンア SHIN JUNG A 國際關係学科

イー・ヨジョン LEE YEO JUNG 國際關係学科

チョ・ヒョンジョン CHO HYUN JUNG 国際関係学科
イー・ユハク LEE YU HAK 国際関係学科
ハ・ヒジョン HA HEE JOUNG 国際関係学科
キム・ミンジュ KIM MIN JU 国際関係学科
チャン・テクフン JANG TEAK HOON 日本語学科
キム・ミンジョン KIM MIN JUNG 国際関係学科

日本：

久保田 有香 KUBOTA YUKA 中央大学大学院 法学研究科
小出 みずほ KOIDE MIZUHO 中央大学 法学部
安西 元 ANZAI GEN 中央大学 法学部
井原 久美子 IHARA KUMIKO 中央大学 法学部
中村 明子 NAKAMURA AKIKO 中央大学 法学部
ほか

ガイド：

李元雄 LEE WON-WOONG
関東大学校教授 KWANDONG UNIVERSITY, SCHOOL OF LAW &
POLITICS、西江大学校、同大国際大学院（政治学博士）。コロンビア大学
東アジア研究所、東京大学法学部客員研究員を歴任
横田洋三 YOKOTA YOZO
中央大学法学部教授、国連大学学長特別顧問。国連人権促進小委員会委員

共通テキスト：

『「慰安婦」問題とアジア女性基金』日本語版・韓国語版
大沼保昭・下村満子、和田春樹編、東信堂、1998
「慰安婦」問題とは何か、アジア女性基金関係者と抛金者の声、
基金のやってきたこと、など

横田洋三 みなさん、おはようございます。まず韓国からのお客さんたち、学生さんたち、ようこそ日本へ、東京へ、そして国連大学へいらっしゃいました。私は横田洋三、中央大学の法学部の国際法の教授をしています。同時に国連大学学長の特別顧問という仕事もしています。きょうのこのセッションは午前中は韓国の学生さんたちと、中央大学の学生さんたちとの率直な意見交換の場になります。午後のほうはほかの大学の学生さんも交えて、一般の人も参加して、この部屋で、もう少し人数が多くなってフォーラムが開かれます。

この会合の背景を簡単に説明します。いわゆる「慰安婦」問題については、この10数年国連の場でも取り上げられ、日韓、それから関係の国々、フィリピン、台湾、オランダ、インドネシア、韓国、そういうところで問題提起されてきました。日本政府は法的な責任はもうすでに解決済みだということで、道義的な責任を認め、1995年からアジア女性基金をつくって、被害者に対しての償い事業を始めました。

私は国連の人権促進保護小委員会の委員として、この問題と、この10数年取り組んできました。そういう関係で、アジア女性基金にも運営審議会の委員として関わってきました。アジア女性基金の活動については、厳しい批判があることも十分承知しています。同時に、基金の目的とか活動についての誤解も残念ながらあるということを認めざるを得ません。いろいろな意見があるということは皆さんもわかっていると思いますけれども、きょうはそういうことを率直に自分の考え、意見を述べる機会にしたいと思います。基金に対する厳しい意見、日本政府に対する厳しい意見、また同時に基金に対する評価、日本政府に対する評価、両方あっていいと思います。

「慰安婦」問題、「基金」一率直に語り合う

今年の2月8日、9日の2日間東京の近くの箱根で、アジア女性基金が主催して、基金のこれまでの償い事業についての反省の会合をもちました。その席にイー・ウォヌン先生も来られて、いろいろとたくさんの方のなかで議論をしました。そこでイー先生から、実は自分の学生さんたちにこの問題を勉強させて、とりわけイー先生が翻訳した『慰安婦問題とアジア女

性基金』という本について感想文を書かせ、それが非常に学生たちの率直な意見が出て参考になったという報告がありました。私とイー先生とで、ぜひそれを韓国の学生のあいだだけの意見にとどめずに、日本の学生にも同じことをやってもらって、日韓の学生同士の意見交流の場をつくりたいと、そのとき相談しました。そういうことできょう午前中、これから12時まで、ここで皆さんと一緒に「慰安婦」問題を中心に日韓関係を考えてみたいと思います。午前中のセッションは韓国の学生さんの代表から2人発表、問題提起をしていただきます。そのあと中央大学の学生2人からまた同じような問題提起をしてもらいます。

通訳は大変素晴らしい通訳、キム・キョンモクさんをお願いします。ソウル・ナショナル・ユニバーシティで外語大の政治学を勉強して、そのあと東京大学の大学院でも勉強され、私の知るところでは、いま博士課程を終えられそうな時期だということです。現在、恵泉女子学園大学の非常勤講師をしておられます。個人的なことですが、私はキムさんとは偶然、キムさんがまだ4歳か5歳ぐらいのときからよく知っていました。キム先生のお父さんと私は古くからの友人で、同じ東大の大学院で勉強し、同じ国際基督教大学で教えていました。そのころは同じ建物の隣同士でした。そのキムさんにきょう通訳をしていただくことになって、このような偶然が起りうるんだなと思いました。

それではこれからイー・ウォヌン先生に司会を代わりたいと思いますが、このあとの発言は、皆さんの近くにあるマイクのグリーンのボタンを押しますと赤いランプがつかます。そうするとマイクが通じますので、話し終わったら押してください。そうしないと少し音が変わりますので。それではイー先生よろしくをお願いします。

イー・ウォヌン 横田洋三先生、ありがとうございます。尊敬する横田洋三先生、そして中央大学の法学部の学生の皆さま、はじめまして。よろしくお願ひいたします。

横田先生とはじめてお会いしてから、5年という歳月がたちました。当時、国連人権小委員会で活発に活動されている横田先生にお目にかかることができました。当時は横田先生がこの「慰安婦」問題について多くの活

動をされているということは存じ上げない状態でした。しかし、日本のアジア女性基金が出版した本を知ってから、その後「慰安婦」問題について知ることが増えました。本日、関東大学の学生、そして韓国の西江大学の国際大学院の学生の皆さんと、この歴史問題について議論ができる場が設けられたことに感謝申し上げたいと思います。

韓日の特殊な過去の関係と未来への協力

日本と韓国の学生さんの皆さまは異なる歴史、そして社会システムのなかで暮らしてはおりますが、未来を担うということでは共通していると思います。歴史問題は日韓の関係を妨げる障害であるというふうに理解しております。無論この問題は、短期間のあいだに解決することはむずかしいというふうに理解しております。多くの日本人の方々は、なぜ韓国の人々はいまだに歴史問題についてそれほどこだわるのかということに疑問を抱かれると思います。そこには2つの問題があります。これは韓国と日本における歴史上の特殊な関係であるということです。1592年に日本が2回当時の朝鮮を侵略したということがあります。韓国と日本の関係は対等な関係ではありません。日本は世界で第2位の経済大国であり、人口も1億3000万人の国であります。力の関係からは韓国の人々は日本人を恐れる傾向があります。歴史的な史実から生まれた、また韓国の人々による力関係からの劣等感と被害者意識というのが反映されているというふうに思われます。

2番目の問題は、東アジアの国際関係から生じる問題です。すなわち日本の未来に関する問題だと思えます。日本が日本としてとどまるのか、それともアジアのリーダーとして役割を担うのかという問題だと思えます。もし後者の立場を日本が選ぶのであれば、隣国に対して、アジア諸国に対して、リーダーとしての道徳的な役割を果たす責任があると思えます。この問題は日本の国民の皆さまが自ら決定する問題だと思えます。すなわち歴史問題に関する日本人の視点が重要なポイントになるのです。きょうは若い皆さま方が自由に、また率直におたがいの差異を、違いを認めながら、正しくないということについては批判をする、そういうような場になればと思っております。きょうこの場にいる韓国側の学生は日本の市民運動、

横田先生の活動をはじめ、日本人の多くの良心的な学者の先生方の活動について、非常に尊敬の念を抱いております。いくらむずかしい歴史認識の問題であったとしても、皆さま方の努力によって、それは解決されうるといふふうに信じております。またきょうこのような場をつくってくださった横田洋三先生をはじめ、外務省の皆さま方にも、またいろんな関係者の皆さま方にも感謝のご挨拶を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

それでは、韓国側の学生のプレゼンテーションを聞きたいと思います。

イー・ジウォン はじめまして、私は関東大学1年生のイー・ジウォンと申します。それでは発表を始めたいと思います。

日本帝国は戦争を準備し、またそれを遂行していた1930年代と40年代、植民地と占領地において、女性たちを強制的に、まただましながら動員し、日本の軍人たちのための性奴隷として使った。国家が1つの政策として企て、また体系的に女性の性的搾取を行ったという点1つと、そして、日本の軍人すべてが可能であったような規模として大きかったということで、いわゆる「挺身隊」問題は、世界でその例を探すがむずかしいような組織的な犯罪であった。終戦になり関係資料は上部の指揮官の命令によってそれが破壊され、また儒教的な家父長社会の雰囲気の中で、被害者もそれを声に出すことができなかったために、この問題は歴史のなかに埋もれてしまった。

1980年代の末、韓国の女性団体が、この問題について問題提起を行い、またアジアの女性団体と人権団体が積極的に参加した「挺身隊」問題の解決のための運動は、国際的の市民運動として発展することになった。50年後、今日においてこの問題が沈黙を破った背景には、人権に対する認識、特に女性の人権に対する認識が高まってきた結果であると信じている。この運動の目標は被害者の侵害された人権の回復である。そして隠されてきた、また歪曲されてきた歴史的な事実を正し、また犯罪の責任者、あるいは責任の所在を明確にすることによって、このような人権侵害が再発しないということにおかれる、その必要性がまたある。

現在、日本国内にもこの問題について謝罪の念を抱く、またその動きが

確認される。戦争を知らない若い世代たちが「上の世代」の行為について心から謝り、またそのような気持ちから金額の多い少ないはさておき、積極的に募金に参加するという行為は、私には大きな衝撃として受け止められた。1人の韓国人として、また「慰安婦」問題について当事者の立場にある私が、この問題についてあまりにも無関心であったということで恥ずかしくなってしまった。

日ごろ私自身をナショナリストだと思っておりましたし、日本に対してそれほどよい感情をもっていなかったにもかかわらず、この感情が明確な根拠のない群集心理的な漠然たる感情であるということがわかるようになった。現在、日韓関係はたがいに国際法上の問題で紛争がまだ残って係争中であるが、実は法的擁護を借りておたがいの国民感情を用いて、戦いをしているにすぎないと私は思う。

そのような状況のなかで社会的な阻害と羞恥心、貧困と健康が弱くなった体の問題について、高齢になった「慰安婦」の女性たちは、「慰安婦」というレッテルをまだ貼られたまま暮らしている。戦争はるか昔に終わったが、その傷はいまだ彼女等の心の中に残り、祖国の見えない暴力のなかで、その傷は深まるばかりである。

いつまでも偏見の目もちつづけるのか

私たちはいつまで偏見をもった目で日本を見るのであろうか。日本の一市民として慰安婦の女性たちに対する謝罪の意味から、自ら基金に参加した純粋な日本の市民たちの気持ちを、なぜこれほど歪んだ視点から見ることしかできないのであろうか。基金に参加した日本の市民たちは、政治家でも権力者でもない一般の人々である。その人たちは、ただ「慰安婦」問題を大雑把に解決しようという気持ちで、国家次元の責任、法的責任問題から逃れるためにお小遣いや年金を節約しながら基金に参加したわけではない。その人たちはただ「慰安婦」の女性たちに、心から謝罪し、純粋な気持ちで基金に参加したのである。

なぜ私たちはそういう人たちの心を理解できず、感情的なげんかに時間を浪費しなければならないのだろうか。なぜ国家の謝罪だけを求め、またそういう方々の謝罪については色眼鏡をかけて、歪んだ視点から見るので

あろうか。もちろん国家の補償と謝罪を重要視しないわけではない。しかしそのような形式的な補償よりは、日本の国民の個々人の謝罪する気持ち、そしてそのような気持ちがより価値の高いものであるというふうに思った。戦争を知らない世代たちが真に謝罪し、謝罪する気持ちから自分のお金を使って寄付をすること、これが真の意味のある補償であるというふうに信じている。このような個々人の真実の心が見えるのであれば、日本政府の態度も必ず変化するものと思われる。

また私たちの態度も変化が必要である。広い視野からこの問題を解決する努力が必要になってくる。日韓両国の国民の気持ちが真に通じ合ったときに、この問題は完全に解決されうと思っている。これからはいままで感情的な争いで後回しにされてきた当事者である「慰安婦」の方々の楽な、残り人生を考えるべきであると思う。この地どこでも待遇されて、また楽に、安らかに暮らすことができるような配慮が必要である。そのときはじめて彼女等の傷ついた心と体はある程度補償されると信じている。(拍手)

イー・ウォヌン ただいま発表されたイー・ジウォンさんが韓国側の学生の代表チームのなかで最年少者です。19歳です。

イー・キョンファ こんにちは、関東大学法学部2年生のイー・キョンファと申します。

『「慰安婦」問題とアジア女性基金』という本を読んで、「慰安婦」をみる多様な視点、すなわち被害者と加害者、被害者の肉親、憤りを感じる女性、謝罪の念を抱く日本の男性、またそういう念を抱かない男性など、多様なボイスが存在するという事実を知ることになった。ある時期まで日本を憎むような気持ちをつくっていた「慰安婦」問題が、いつからか私の記憶から消えていった。いろいろな側面から感情的にしか対することができなかったこの問題を、今回のきっかけを通じて現実的な視点から見ることができた。韓国人の立場から「慰安婦」問題は民族問題として見ることも可能であり、また女性問題として扱うことも可能であると思う。しかし1つの視点からだけ見ることはいけないと思う。女性問題と民族問題、2つの側面を統一し、またバランスを取りながらそのような問題にアプローチする必要があると思う。

「従軍慰安婦」とは戦争の当時、日本軍慰安所に召集され、将校に、あるいは兵士に性暴力を受けた女性を指す。「慰安婦」の動機は、日本軍が中国人女性をレイプしたことから始まっている。しかし性病の予防と軍事秘密が漏れることを防止するという理由などで、性的な慰安設備が設けられるようになったのである。当初は日本人の売春婦を募集したが、その数が足りなくて、当時の朝鮮半島までその募集範囲が広がった。そのとき韓国の女性たちは、いまだ16歳、17歳の少女たちが性的な奉仕を行うという事実を知らないまま召集されてしまった。当時の朝鮮の女性以外にもフィリピン、インドネシアなどの女性もいた。戦争中に亡くなった「慰安婦」女性が数多くいらっしゃるため、慰安所に集まった数がどのくらいの数であるかは正確にはわからない。

1945年8月15日に戦争は終わったが、またその結果、韓国で独立万歳と叫んでいるときに、そのとき女性たちはもうすでに人間としての尊厳が奪われたあとであった。また、若いときを地獄のような日々を過ごした、いまいわゆるホルモンたちが、その人たちが補償されるような事実の究明と日本側の謝罪、歴史教育、そして補償を受けるということがなかなかむずかしいということが残念でならない。しかしそのようなプロセスも容易なことではない。日本政府は「慰安婦」女性に対して国家的補償を行う気持がない。恥じるべき歴史を、再び恥じるべき歴史として確認しているような日本政府はいけないと思う。「従軍慰安婦」の制度を徹底的な女性差別、また民族差別であるというふうにとらえている。また女性の人格の尊厳を根本的に侵害し、民族の誇りを奪ったというふう理解している。このような行為は人権侵害という事実であるにもかかわらず、日本は法廷においてそのことを認めたにもかかわらず、日本政府の態度はその問題をそのまま放置しておくという矛盾した立場を取っているというふう理解している。

しかし幸いな点は日本の市民が、また市民運動が活発になった結果、「慰安婦」問題を知ることになり、そのような日本人の数が増えることから、国家的なレベルではなくて国民のレベルから自ら反省し、謝罪するようになったという事実である。したがって日本市民の自発的な募金として出発したアジア女性基金も創設されるようになった。アジア女性基金はアジア

軍隊慰安婦の被害者たちに対する補償金と橋本首相（当時）の謝罪の、また反省の手紙を交付した。しかしながら韓国では、軍隊の「慰安婦」被害者に対する日本政府の賠償責任を回避する逃げ道であるというふうに反発し、その間補償金の支給が中断されてきた。これはすなわち韓国の人々が日本の市民運動家たちが過ちを感じて謝罪しているという事実を信じていないということである。日本政府の態度のために、正しい考え方をもっている日本市民の真実が受け入れられないということは残念です。

過ちを認めること、寛容であること

キリスト教では天下より貴重なものが人間であるという教えがある。日本政府がその過ちについて認めることを回避している理由についてはよくわからないが、何よりも人権ということが重要なものであると理解してほしい。過去は忘れることから解決される問題ではないと思う。最も重要な点は、過ちを求め寛容の気持ちを抱くという心があり、その2つの気持ちがおたがい通じ合うように表象されることから始まると思う。すべての人間は罪を犯す存在である。またその一方で、自ら犯した罪について過ちを求めること、またそれについて許さないことも罪であるというふうに理解している。

「慰安婦」のなかで尊敬される女性が1人いる。ロサ・ヘンスンさんとい名前の方です。ロサ・ヘンスンさんはフィリピン人であり、14歳になったとき2回も日本軍によってレイプされ、16のときに「慰安婦」になることが強制された。そしてその後、9カ月のあいだ昼2時から夜10時まで兵士にレイプされ、また9カ月後にゲリラによって救出されるまで、そのような「慰安婦」としての生活を繰り返してきた人である。救出されてから1年後結婚したが2人の娘が生まれたあと、また3年後にご主人が亡くなり、その後一生懸命1人で子どもを育ててきた方である。「あなたは日本人に対して憤りを感じますか」という質問に対して、彼女は、「私は苦痛を受け止めることを学びました。同時にまたそれを許すことも学びました。イエスキリストが自ら十字架の犠牲となり、そのようなことをした人々を許すことができることから、私もまたそのような人々に対して寛容の気持ちを抱くことを学びました。しかしながら私は、私が死ぬ前に正義が実現さ

れることを願っております」という言葉を残している。

もし現在生きている「慰安婦」のハルモニたちが、このような気持ちを抱いてくだされば、万一日本政府が自らの過ちを認めないとしても、また補償を、賠償を行わないとしても、ハルモニたちの勝利であると信じている。これは彼女たちだけの問題ではなくて、被害者の国民である人々にも該当する問題であると理解している。私たちがフィリピンのロサ・ヘンソンさんのように許す気持ちを、寛容の気持ちを抱くことができれば、日本の国民は私たちをより尊敬する気持ちから見てくれると思う。(拍手)

イー・ウォヌン いま発表してくださったイー・キョンファさんは、飛行機に乗る前から健康の状態がよくなくて、きょうまで、まだ1食も食事をとっていらっしやらない状態です。大げさにいうと、水も1口も口にしていないうことです。韓国女性の強さを私は自ら確認いたしました。

それでは続いて、日本の中央大学の学生の発表を聞きたいと思います。

小出みずほ 中央大学法学部4年の小出みずほと言います。きょうはわざわざ韓国からいらしてくださってありがとうございます。

私も皆さんと同じように『慰安婦問題とアジア女性基金』という本を読みました。きょうは率直な意見交換をしようという場ということなので、むずかしい問題もいろいろあるのですが、素直に私たちの世代が思っていることを私の視点からお話しできればと思います。

本のなかにもあったように、いちばん問題とされているのは国家補償の問題だと思っています。それに関しては平和条約や日韓請求権協定というもので、法的には解決されたという国のスタンスがあると思います。こういう障害があるなかでアジア女性基金というものが設立されて、国民の意思を、償いの気持ちを表現しようということで、アジア女性基金ができたという理解をしています。

アジア女性基金ができるまでにも、国内でさまざまな意見がありました。残念なことに「慰安婦」問題自体をなかったものとする人々、もう一方で「慰安婦」問題を国家が補償しなければ意味がないという人々、2つの意見が対立していました。また、アジア女性基金が活動するなかでも、特に韓国において国内での批判というものが強かったというふうに聞いています。

特に活動について、2002年5月に償い事業というものが予定より早く打ち切られたというのは、韓国側の理解が得られなかった、こちら側として理解を得ることができなかったからだと思っています。いまお話しくださった2人の学生さんの意見のなかにも、「日本帝国」という言葉や、日本政府が償う気持ちがないというような意見があったことに正直驚きを感じました。というのは、私たちいま戦争を知らない世代が、たぶん日本自身を「日本帝国」ということはすごく稀というか、そういう意識をもっていないというのが事実だと思います。

「慰安婦」問題について私たちがどういう教育を受けているかという、特にそれを学校のなかで特別に習うということはないと思います。そういったなかで私がいちばんに問題だと思うのは、「慰安婦」問題を自分自身の問題としてとらえることが、いまの日本人はあまりできていないと思うことです。もちろんアジア女性基金にお金を出すようなちゃんと自分自身の問題として考えて、償いをしたいと思う人もたくさんいることは事実です。けれどもやはり過去のことや、自分とは関係ないことと思っている人も多いと思います。私たちはこの本を読んだり、いろいろな勉強することで実際にあったことや、さまざまな意見があること、日本側の責任というのをすごく感じることができました。けれども、ふだんふつうに暮らしている人々にとって、そういう機会は稀であると思います。

なぜそういう状態が起きるかという、日本の社会の変化というか、韓国との違いで大きいのが、それを語り継いでくれる人がいないということだと思います。日本はいま核家族化が進んでいて、戦争を体験した世代と一緒に暮らすということが少ないのが現状です。そういったなかで、私たちが直接に戦争というものを自分たちの歴史のなかに位置づけることがむずかしくなっている、本のなかで知るものというようなことになっているのがいけないのかなと思います。

市民レベルから国レベルでの理解へ

先ほど、日本政府は償う気持ちがないという言葉があったのですが、でも、では日本政府というのは何なのかということをやっと考えたいと思います。本来、日本政府は日本国民の代表であるはずだと思います。でも実際

は、国家レベルと市民レベルというので異なる動きというか、賠償に対しての対応が違っているという現状があります。この市民レベルでせっかく起きている償いの気持ちや、理解をし合おうという動きを、長期的に国家レベルへ押し上げられればと思います。これからもっとフランクに話し合って、おたがい私たち自身も韓国でどういうふうに「慰安婦」について話されているのかというのがわからないので、もっと話し合えればと思います。(拍手)

イー・ウォヌン ありがとうございます。次、お願いします。

安西元 こんにちは、中央大学法学部4年の安西元と申します。きょう皆さんに、ここ東京でお会いできたことをとてもうれしく思いますとともに、こうした機会を与えてくださった皆さんに感謝したいと思います。いま発表されたほかの3人の皆さんほどしっかりとした意見ではないかもしれませんが、自分なりにアジア女性基金という活動が評価できるものかどうかということについて考えてみたのでお聞きください。

先ほど小出さんが述べていたとおり、日本で特に「従軍慰安婦」問題が歴史という教科のなかで教えられることは特になかったです。だから僕が初めて「従軍慰安婦」問題というものについて詳しく知ったのは、大学1年生になってからでした。僕はもともと国際法に興味があったので1年生のときに国際法のゼミを選んだのですが、そのなかで扱った本の1つが、「従軍慰安婦」に関するものでした。私は日本が第二次世界大戦当時に植民地地域において残虐な行為をやっていたということは知っていたのですが、具体的にどんなことをしたのかという詳しい事実はあまり知らなかったのので、その問題に初めて触れたときに、「従軍慰安婦」問題の残虐性を初めて知って、あまりの非人道性に驚愕しました。日本人であることが恥ずかしいとすら思いました。その気持ちはいまでも変わりません。

しかし「従軍慰安婦」問題に対する僕の考え方は大きく変化いたしました。当初は韓国国内のNGOや、日本の国内で活動するNGOが主張していることに共感して、日本は直接被害者個人に対し損害賠償を行うべきであると考えていました。しかし国際法を学んでいくにつれて、個人賠償というもののむずかしさを感じ取ることができました。法律には限界があっ

て、できることとできないことがあるのだということがわかりました。

そして現在、私は「従軍慰安婦」問題を次のように考えています。「従軍慰安婦」問題は2つの側面を抱えた問題だと思っています。その1つは政治的な側面だと思います。歴史教科書の記述や靖国神社への参拝等をめぐって引き起こされる日本と韓国とのあいだの緊張関係と同じく、「従軍慰安婦」問題はひとたび白熱化すれば、日本と韓国との政治外交上の関係を著しく緊張化するという性質をもっています。

これに対して「従軍慰安婦」はもう1つの側面をもっています。それは大規模な人権侵害としての人道的な側面だと思います。旧日本軍が第二次世界大戦中に支配地域の若い女性をだまし、あるいは強制的に拉致をして、慰安所において慰安行為を強要したという歴史的事実は、当時の国際法から見ても明らかな違法行為であって、重大な人権侵害にほかならないと考えています。「従軍慰安婦」問題はこのような2つの側面を有する問題であると思います。

人権の問題で、民族・政治問題ではない

そしていままでの日韓関係においては、おおむね政治的な側面ばかりが強調されて、政治の延長上で感情的な議論の応酬が繰り返されてきました。そして、この問題が内包するもう1つの側面、つまり人権的な側面ですが、この側面は見過ごされるか、あるいは感情的な議論のなかで扱われる1つのネタとして用いられてきました。つまり人権的な側面は政治的な側面の影に隠れてきたのですが、でも「従軍慰安婦」問題の本質は、そうした政治的な側面にあるのではなくて、僕は重大な人権侵害としての人道的な側面にあると考えています。日韓の歴史をめぐる対立を解決し、日韓関係をより発展的なものにしようとするためには、こうした2つの側面は明確に切り離して考えるべきであると考えています。その意味では先ほどイー・キョンファさんがおっしゃっていた、民族問題と女性問題を一緒に考えるという考え方とは若干異なる考え方をしています。「従軍慰安婦」問題というのはあくまで人権に関する問題として扱われるべきであって、その政治的問題として扱われることは極力防がなければならないと思います。

その意味で、アジア女性基金の行っている償い事業というのは、とても価値のあることだと感じました。その理由は3つあると考えています。

まず1つにアジア女性基金が問題の政治問題化につながらないように慎重に配慮しながら活動を行ってきていて、日本の侵した人権侵害の結果、重大な被害をこうむった女性たちに対して、その罪を償うというかたちで人権侵害の側面を政治的側面とは明確に切り離して活動しているということが評価できると思います。

また第2に、基金のお金が日本国民から寄せられた基金によって構成されているということが、何よりも重要だと思います。先ほど小出さんが言っていたことと若干同じになってしまうのですが、日本と韓国では国民の国家観というものが大きく異なると思います。僕は日常生活を送るうえで日本国民であることを実感するということは本当に稀であるし、民族としての誇りみたいなものを感じたことは、たぶんいままで1度もないと思います。日本人としてのアイデンティティを感じる機会といえば、サッカーとかオリンピックのときくらいです。それよりもむしろ日本人は自分の目の前のこと、例えば僕だったら自分の進路のこととか、テストのこととか、家族のこととかなんですが、そういったことを考えるので精一杯であるというような感じがあると思います。そうであるから、日本人の国家に対するアイデンティティというものは、韓国に比べてとても弱いと思います。徴兵制や、大統領制のある韓国に比べて、日本というのは徴兵されることもないですし、自分たちのリーダーを自分たちで直接選ぶこともできないという国です。そういうふうには日本人が国家というレベルよりも個人というレベルが強くなっていることを考えれば、補償を行う主体が国家であるということよりも、むしろ自発的に拠出した国民1人1人であることのほうがより償いとしての意義は大きいのではないのでしょうか。もちろんアジア女性基金は強制連行や軍票問題といった戦時中の日本軍による犯罪行為のすべてを範疇におさめたものではありません。しかし今の日本にとっては、より本質的な補償方式であると私は考えています。

そして最後にアジア女性基金の活動が評価できる第3の点として、基金の活動が償う側の論理を押し通すといったものではなくて、補償される側の意思や生活状況を尊重している点でも素晴らしいことだと感じました。その意味では、元「従軍慰安婦」の方たちが償い金を受け取るか否かの選択を与える機会すら与えていない韓国政府やNGOの対応には、大きな疑

間を感じております。僕からの意見は以上です、いろいろご批判いただければ幸いです。ありがとうございます。(拍手)

イー・ウォヌン 5分間休憩を取って、また再開したいと思います。

【休憩】

横田 それではここからディスカッションしたいと思います。韓国のイー・ジウォンさん、イー・キョンファさん、小出みずほさん、安西元君、その4人の方の本当に率直ないい報告を聞きました。これをきっかけにどうぞ皆さん自由に発言をしてもらいたいと思います。質問でもいいし、自分の意見でもいいし、どうぞ。誰から発言しますか、まずどうぞ。自分の名前を発言して。

石井 中央大学2年の石井と申します、よろしく申し上げます。

私が4人の方の意見を聞いていちばん思ったことが、日本と韓国で「慰安婦」問題というものに対する教育の仕方が違うという点です。そもそも「慰安婦」問題を語るにあたって、「慰安婦」問題というものに対する考え方が違うならば結論は大きくずれてしまうと思います。そこでせっかく日本と韓国の学生が集まったということで、それぞれどのような教え方をされてきて、自分はどのような認識なのかという意見をちょっとうかがいたいのですが、どうでしょうか。

横田 いまの点は、もうすでに部分的には出てきていますけれども、例えば韓国では一般に中学、高校、大学でどんなふうに教えられていますか。

イー・ヨジョン こんにちは、私は西江大学の大学院生のイー・ヨジョンと申します。

まず韓国の状況についてお話し申し上げて、そのあと質問が1つあります。韓国の中学、高校では歴史の科目で日帝時代という項目があって、その時期について学ぶことがあります。内容としてはいつから占領が始まって、どのようなかたちで統治が行われたのかということなどについて学びますが、戦争そのものの状況については、それほど具体的に扱われることはありません。したがって、「慰安婦」問題について簡略には学ぶことになりま

すが、それほど具体的に学ぶことはありません。しかしながらその教科を教える先生たちが、また愛国心を高めるためにそのような趣旨から、このような問題について扱われて学ぶチャンスはあります。

質問のほうに関してですが、安西さんのお話のなかで、国家の政治的部分と人道的な責任というのを分けてとらえるべきであるというふうにお話が出たと思いますが、もしそうであるのであれば、どのようなかたちで歴史的な事実を日本人に知らせることができるのでしょうか、ということについてうかがいたいと思います。

横田 それでは安西君に直接質問が出ましたので、どうぞ。

安西 お答えになるかどうかかわからないのですけれども、僕が言いたかったのは、国家と国民を切り離すということではなくて、政治と人権的な問題を切り離すということで、政治問題は政治問題、人権問題は純粋に法的な問題としてとらえるべきなのではないかということです。もちろん過去に日本が行った残虐な行為については、教育を通して国民の皆さんに知らせていくべきだと思っているし、そういった意味で、国の担う役割も大きいことはもっともだと思います。

日本で歴史教育というと日本史と世界史の2つにわかれます。日本が過去に行った侵略行為について主に触れられるのは、日本史のほうです。でも縄文時代という時代があって、そういう古い時代から順々にやっていくので、結局肝心な日本の侵略行為については1年の授業のなかで時間がなくて、まったく触れられないこともあったり、もしくはものすごく短く教えられただけになってしまったりしているのが、日本の教育の現状です。

これとは別に平和教育というプロジェクトを取り入れている高校もあって、僕が出た高校にも平和教育というものがありました。これはどういうものかということ、修学旅行なので日本国内を訪れる際に、長崎、広島、沖縄といった第二次大戦の跡の残るところに行き、それについて自分なりに詳しく調査を行うという、そういう学習です。

横田 ほかに、どうぞ。

楠橋 はじめまして、中央大学4年の楠橋と申します。私の率直な意見をこれから少し述べさせていただきたいと思います、よろしく願います。

まず、私は日本の大阪というところから出てきて、いま東京で勉強して

います。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、大阪というところは在日朝鮮人、韓国人の方がたくさん住んでおられるところで、私のまわりにも小中高含めまして、数多くの「在日」の方と接する機会がありました。そういう背景もありまして、「在日」問題等を含めてその一環としまして、「慰安婦」問題は学校で道德教育の一環として扱われることがありました。

いま日本と韓国の教育の差異、それによって感情等のずれが生じているというような話をうかがいましたが、確かにそれは感じるがあります。道德教育の一環としては学ぶことがありましたけれども、やはり日本史、歴史等の授業では先ほど安西君が言ってくれましたとおり、あまり時間が割かれることはありませんでした。

そういう背景を簡単に述べさせていただきましたが、私の考えとしましては、これまでいろいろな意見をうかがってしまして、やはりこの問題は日本だけの問題ではないということに大きな問題性があると考えています。まず韓国の方から見られまして、アジア女性基金に大きな批判があったということですが、日本国民が善意で行ったとしても相手の韓国の方は、それが日本の行いというふうに見られるのではないのでしょうか。市民のレベルで理解がないところでそのような行いをしたところでも、やはり国家間のレベルでの政治問題のように見られがちというような現状が否めないと思います。やはりそのようなものを解決するためにも、善意でやっていることであるかどうかというようなレベルから、市民間の対話等、問題解決のためには必要ではないのでしょうか。とりあえずい思っていることを述べさせていただきました、ありがとうございました。

横田 いかがでしょうか。

メディアの扱いから政治問題に

ハ・ヒジョン こんにちは、西江大学国際大学院に在学中のハ・ヒジョンと申します。いままで歴史教科書の問題について、いろいろな日韓関係の議論がまたあったと思いますが、個人的な視点を述べたいと思います。

多くの方々が、韓国の学校教育、高校教育において日韓関係の問題などについて数多く扱っているというふう認識されていると思いますが、私

の個人的な意見としてはそうではないということです。日本の入試と同じように韓国の学校教育も、入試の合格というのが最大目標の1つになってしまって、中学、高校の学校教育においても国語、英語、数学など得点倍率の比重の高いものに偏ってしまうのが現状です。それから歴史科目というのは、週に1時間、あるいは2時間というきわめて短い時間で行われておりますし、そのなかで植民地の、植民地支配の一部分としての「慰安婦」問題というのは1行から2行扱われる、叙述されるのがせいぜいでありませぬ。

私個人としても、「挺身隊」というふうに韓国では言っていますが、この問題について認識するようになったのは、学校教育ではなくてメディアとか本を通してです。メディアの特性上このような問題を少しプロパガンダ的に扱ったり、政治的な解決のために扱うということから、韓国の読者、あるいは視聴者たちがこの問題を政治的な視点から見てしまうというのが1つのポイントだと思います。

横田 ありがとうございます。さっき安西君がちょっと指摘した政治的な問題と人道・人権問題と区別するというポイントとの関係で言うと、むしろメディアはそれを少し政治化したがる傾向があるということ、いま指摘されました。日本でも同じようなことあるかもしれませんね。ほかにいかがですか。

キム・ミンジュ 私、西江大学国際大学院のキム・ミンジュと申します。先ほどの安西さんのお話について、人権問題を人道的な視点から政治的な問題より扱うべきであるとお話しされたと思います。そのためには「従軍慰安婦」問題の行為、歴史的な事実について教育を行う必要があると理解しています。日韓関係の発展的な関係をつくりだすためにも、そのような状況が求められています。

現在、日韓関係は前進的な発展途上段階にあると理解していますが、しかしながら両国の教育において差異があると理解しています。韓国も日本も入試教育というのが非常に重要な状況におかれていまして、歴史というのはそのようなパート、1つの入試のなかの一部分にすぎないために、それほど重要視されていないという側面が指摘されます。韓国では、しかしながら中学や高校の課程で、この歴史問題が重点的に扱われています。

事例的に少し一部だけを紹介いたしますと、占領期の問題について、韓国の場合は四代政策というふうに言っていますけれども、民族抹殺政策などいろいろな時期区分を行いながら政策を行っているというのがあります。このような時代的なことについて、比較的詳しく学ぶということがあるんですけども、韓国側の対応というのはそのように教育が行われているということが指摘されますが、しかしながら日本のほうでは一般的に教育として深く扱われることはない。中学、高校などの教育が重要視される時期において、タイミングを逃してしまうと、つまり教育の基盤をそのタイミングが逃されるということによって重要であるという意識化、またこの問題について認識する思考能力には限界が生じてしまうのではないかということ、私の指摘としてあげたいと思います。

そこで認識の問題があるなかで、安西さんのように国際法を学ぶ、また国際法を通じて理解できるチャンス、機会があった方はそれはそれですごく重要だと思いますけれども、そういうようなチャンスがなかった方々は、どのように関心、意識化を高めていけばいいのか、またそのような教育の違いによって、どのような方法論で日韓関係、あるいは歴史認識の問題を解決して発展させながら討論を行うことができるのか、つまり個人的にどのような方法論でそれができるのかということについて質問したいと思います。

横田 まずは、どうぞ。

日本の学生 いまの意見に対して個人的な回答というか、意見を述べたいと思います。私がよく思うのが、日本人はそもそも歴史に対してあまり興味をもっていないという傾向があるのではないかと思います。別にこれはすべての日本人がというわけではないですけども、先ほど安西さんのように、大学に行ってから、例えばこの「慰安婦」問題を知ったとか、そういう人は非常に多いと思います。

そして大学でも習わない人、いま出てきた意見ですが、その人はどうなるかと言うと、これは私の意見なんですけど、日本のマスコミからドキュメンタリー番組などで情報を得ることになると思います。しかし、私はここに大きな問題があると思います。それはマスコミがこの問題を取り上げるときに、これが人権問題としてではなく、またまたプロパガンダとして

政治的に、どちらかと言うと民衆操作というか、そういう意味合いが強くと現れてきているのではないかと考えてしまいます。ちなみにここで言うマスコミの意見というのは、日本側から見た視点というよりは、どちらかと言うと韓国側から見た視点の意見が多く述べられていると思います。

そういう意味では「慰安婦」問題を、いま現在多くの日本人が知っていると言うことはできても、それが果たして日本人が自分たちで学んだ結果だとは言えないと思います。そう考えると、結局上から教えつけられた意見でしかないのです、ある程度まで反省とか謝罪というところまではいっても、その次の段階の日本と韓国の歴史認識をおたがいに話し合っ解決するという点には、多くの場合、至らない可能性があると思います。

いま言ったことを簡単にまとめますと、例えば「慰安婦」問題に関して言えば、おたがいに謝罪とかはある程度近い未来に出てくる可能性はあると思います、しかし、それ以降のもっと抜本的な日本と韓国の歴史認識の違いという点を問いただすことは、いまの日本の流れでは私は絶対できないと思います。これは日本側が解決していかなければならない問題だと思います。

そのとき重要になってくるのが、先ほど安西さんがおっしゃったアイデンティティという問題だと思います。私はちょっとここで申し訳ないんですけども、安西さんの意見に批判をしたいと思うんですけども、安西さんはこの問題を人道的に考える必要があると言ったところで3つの意見をあげました。そのうちの2つ目の意見が日本人はアイデンティティをもっていないと、韓国に比べて少ないからこれを人道的に考えるべきではないかという意見がありました。ただこの意見は、韓国側の方から見たときに、納得できる意見とは思いません。なぜならば、アイデンティティがないから人道的に解決すべきだというのは、逆にこの問題に対してアイデンティティを強く感じている韓国側の意見をつぶしてしまっている意見だと思います。ですから、私はこの問題を考えるためには日本人が再びアイデンティティとは何かと、その点から考えていき、自分たちの歴史認識をつくると、そのうえで韓国の方々と協議を行っていかないかぎり、いつまで経っても解決には至らないと思います。長くなりましたがこれで終わりたいと思います、ありがとうございました。

横田 はい、どうもありがとうございます。ほかに、いかがですか。

イー・ユハク こんにちは、西江大学国際大学院のイー・ユハクです。いままで日韓のこの友達としての、仲間としてのお話をうかがった結果ですね、どの国も民族、そして優越性やアイデンティティの問題について感じていない人はいないと受け取っています。もし立場を逆にして、韓国が日本を侵略し、民族的な立場から「挺身隊」ということが存在したと仮定してみましょう。そうしたら皆さまはどういう立場で、この問題を認識していたか考えてみてください。被害者の立場からの意識が存在し、またそれが劣等感であるかもしれません。しかしながら、被害者としての意見というのは、マスコミで扱われたり、被害の当事者からのボイス、その話、伝承を通して克服されるべきものであるというふうに努力されてきました。それは当然のものであると理解しています。もし逆の立場であった、例えば韓国が日本を侵略して皆さんが同じ逆の立場であったと仮定しても、皆さまの立場は私たちと同じであったと思います。

「人権」「女性」——韓国でも加害者意識

「挺身隊」問題の討論を通じて私が反省することになったのは、韓国人もまた被害者意識だけではなくて、また劣等意識だけではなくて、加害者としての意識ということを感じるようになったということです。つまり諸外国に対して行った行為に対しての反省ということが見えてきたということです。1980年代人権活動、人権とか女性という 이슈が関心として浮上してから、その以前から「挺身隊」という問題については知っていましたし、「慰安婦」というのは存在していたということについても知っていました。しかしながら当時までは、ただかわいそうな人々という認識だけが存在しており、その人たちの権利を回復してあげようという視点は存在しなかったということです。人権回復の視点というのが生じたのは、のちのちのことでありますし、その前は「あっ、あの人たちが『挺身隊』の人なのだ、《慰安婦》なのだ」というような偏見があったことも事実です。

1980年代以降、NGO活動や人権活動というのが活発になることから、日本とか韓国という、そういう国家の枠組みを越えて、女性とか人権という視点からこの問題が扱われるようになったということが重要であると理

解しています。歴史問題に認識の違いがあり、この問題の解決の努力が始まってから時間的にそれほど長い歳月が経っていないということから、この問題は短期的なアプローチではなくて、長期的な視点からのアプローチが求められると思っています。したがって、日本側の皆さまのなかでは大学に入る前はこのような事実について知ることがなかった方もいらっしゃると思いますし、したがって、その事実をありのまま受け止めて、政治的な介入がない状況で日本も韓国も事実をそのまま扱うこと、つまり人間としての視点からおたがいが助け合ったり、人権の回復ということを求めたいと思います。そのためには討論という場が非常に重要だと理解しております。ありがとうございました。

横田 はい、どうもありがとうございます。ほかにいかがですか。

久保田 中央大学大学院の久保田と申します、こんにちは。

いま私の前のお話、その方の長期的アプローチということに対して、1点だけ補足したいと思います。そのアプローチが「従軍慰安婦」問題を考える私たちにとっては、大変重要なポイントになってくると思います。なぜなら、私はこの「従軍慰安婦」問題は、もちろん法的な側面、政治的な側面はあると思いますが、なかでも女性の人権としてこの「従軍慰安婦」問題をとらえることに意味があると思っています。

そのようなアプローチをとったときに、長期的アプローチをまた並行して考えたときに、アジア女性基金の活動の1つでご紹介したいと思うのは、今日的な女性問題に対しても取り組もうという姿勢を最近強めていることです。実際、私は武力紛争下の女性の人権問題研究会というアジア女性基金の主催する研究会に、ここ最近出席しています。もちろん「従軍慰安婦」問題の重要性や特殊性を広くアプローチすることによって消すということでは決してないと思っています。ただこういう今日的な女性問題として「従軍慰安婦」問題を考える試みを通じて、私たちのいままでの経験がより広いコンテキストで、そしていま例えば日韓関係に限定されず、例えば現在これからこういう女性の人権問題、女性に対する暴力という問題が頻発するわけで、そこにこういう経験が生かせればと思って研究会に参加しています。そういう意味で先ほどおっしゃった長期的アプローチの1つとして、アジア女性基金のなかでも1つの活動が始まっている、ということをお伝

えしたくてお話ししました。ありがとうございました。

横田 どうもありがとう。ほかにご発言は…どうぞ。

韓国の学生 日韓関係が長期的なアプローチによって解決されるということには共感いたします。日韓関係において文化の違いもありますし、教科書のテキストの内容も違いますし、また歴史認識も違う、つまり認識の違いがあるということなので、これを1度に解決することはむずかしいと思います。

小出さんのお話のなかで「日本帝国主義」という言葉に違和感をもたれたというお話がありましたが、なぜ50年前のそういうことについて私たちがそのような表現を用いるのか、つまりこれは私たちのおじいさんたちが一緒にともに暮らすなかで、強制連行を避けるために逃げ回っていて、それで見つかって摘発されて、暴力、暴行を受けたという話を聞いたり、あるいは私たちのおばあさんが、警察、当時は巡査という言葉、韓国語では「スウサ」という発音になりますけれども、そういう警察という表現を使わずに日本式の表現を使うこと、そういうことからいまだこういう被害者意識が強いということで、短期的なアプローチでの解決というのはむずかしいというふうにとらえております。

しかし「慰安婦」問題においては長期的なアプローチではなくて、短期的な視点でとらえる必要があると思っています。なぜならばこれは本にもありましたけれども、「慰安婦」の方々の人生が、残りがあまり長くないということです。これを短期的に解決しない場合、政治的にこれをまた延長したりということになりますと、補償の問題ということが未解決のままで終わってしまう、そうするとほかの 이슈、あるいはほかの次元にまたつながれてしまって、問題がより複雑になってしまうということです。

横田 はい、どうもありがとう。では、こちらからいきましょうか。

船越 中央大学2年生の船越と申します。

先ほどから人権に対してさまざまな意見が交わされているのですが、私の人権の考え方としては、この「慰安婦」の関連として違うものを考えています。まず、先ほど韓国からの代表のイー・ジウォンさんとイー・キョンファさんのお二人が、アジア女性基金に対して国民が参加して基金に寄付をしていることに感心をしているとありましたが、私はそれとちょっと

反対の意見をもっていて、それに関しては日本が韓国に与えるべき補償というのは、責任というのはやっぱりあると思うんですね。やっぱりサンフランシスコ条約と日韓協定で規定されていることによって、それが補償されないということは私は不当だと思っていて、アジア女性基金というのは国民によって運営されていて、ボランティアで構成されているものではあるので、それは国家としての責任を負っているものではなくて、また先ほどの安西さんの批判にもなると思うんですけど、政治的な側面と人権的な側面を切って考えるようにと言っていました、それを切ってしまうと今度は現在韓国の人たちが運動をしている国家賠償ということが切られてしまうのではないかと思います。人権的要素にも、「慰安婦」に対してはILOが発しているように、強制連行による日本人の行為というのはILOに反するものであるということも出されているんですね。それに関してはやっぱり、そういう人権的な問題もあるんですが、やはり女性に関する問題というのが重要だなと私は思っています。

それはなぜかと言うと、この本のなかにもあったのですが、多くの女性がかつと戦争時に被害を受けているというのに、現在に至ってさまざまなインタビューなどを通して、また新たな被害、傷を負っているということなのです。それに関して新たな人権侵害であって、これからそういった彼女たちに対する心のケアが必要であると思っていますし、それに加え、やはり現在認定されている「慰安婦」は数が限られていて、それには女性が主張するところが大変だと思うのです。やはり性的被害にあった人たちというのは、なかなか言い出すという機会がなくて、そのなかで隠してしまってそのまま生活して過ごすという人もいたりとか、恥ずかしさで自国内に帰れないという人もいたりするなかで、そういった人たちに対するケアというのがまず大事だと私は考えます。

最後に、やはりこれからこの「慰安婦」問題に対して私たち若者が新たに認識をもってこの問題に対処しようというか、貢献しようと思うことが必要だと思います。それというのは、やはり対話によってさまざまな文化の意識だとか、先ほど述べられた歴史的な共通点などがあまりないというか、相違点があったりということがありましたので、そういった共通のことをもっておたがいの文化を理解していき、問題に関しても共有して、い

ろいろな対処というか、これから解決策に向けて考えていけたらいいなと思っています。

横田 どうもありがとう、こちら、先ほどいましたね、どうぞ。

チョ・ヒョンジョン 西江大学国際大学院のチョ・ヒョンジョンと申します。

現在までの意見を私なりに整理してみますと、両国の話においては歴史的な教育の違いがあり、その結果、認識がある。そして「慰安婦」問題においては、人権的なアプローチが求められ、中長期的なアプローチが必要である。そのためには若い人たちの交流、その交流からまた解決策が期待される、求められるというふうに整理できると思います。

この問題は女性の問題から扱われるものだと思いますけども、しかし敏感、センサティブな問題であるということをおぼろげに忘れてはいけません。なかなか「慰安婦」であるということをおぼろげに名乗ることがむずかしいということが1つありますし、「慰安婦」であるということをおぼろげに名乗ったうえでも、差別ということが韓国のみならず、いろいろと存在しているということです。したがって、私が「慰安婦」ですということをおぼろげに名乗ることがまずむずかしい。市民的なケアの重要性というのも、先ほどのお話のなかからうかがうことができました。

数字的には20万という数も韓国側の推測では「慰安婦」の数としてあげられていますが、数としてはこれは非常に低いレベルの認識であるというふうに理解しています。一部の方々は生活も収容センターみたいなところで集合生活をされているような部分があるように、非常に敏感な部分であるという。日本側のお話のなかではその代案、オルターナティブとして、解決策としてアジア女性基金がつくられて、活動されているというふうにもうかがわれていますが、昨年5月から活動がまた中断されているということもうかがっていますので、その現状についてももう少し教えていただきたいなと思います。

この本、テキストが1998年に書かれた本だと思っています。その後のアップデートが知りたいんです。韓国と台湾の市民団体との摩擦、コンフリクトが非常に多かったというふうにもうかがっています。現在ではその他の国々にもあると思いますので、アジア女性基金とその他の国々との関係

というも教えていただきたいし、その後の、1998年以降の状況も具体的に教えていただければと思っています。

横田 いまアジア女性基金についての質問がありましたので、その点について私の知っているところをお答えしますが、1995年にアジア女性基金が設立されて、まずは日本国民全体に募金を呼びかけたわけです。5億円を超える募金が集まりました。予定はもう少し多かったです、そこまではいきませんでした。しかしいずれにしても私たちがもう少し多く集めたいと思いましたが、ご存じのとおり、最初から非常に強い反対運動があったために、企業などがその反対運動の人たちの存在を無視して寄付することができないということで、日本の企業は協力的でなくあまり寄付をしませんでした。

そういうなかで日本の国民から募金を集めたわけですが、いろいろな人たちが募金をしました。まず政治家、特に総理大臣以下の大臣、この人たちには多額の寄付をするように要求し、実際にしてくれました。それから国家公務員、地方公務員のような人たちにも日本の国家の担い手としての責任があるということを私たちは主張して、グループごとにまとまったお金を寄付してくれました。とりわけこの問題に深い関わりのある外務省、防衛庁、文部科学省、厚生省、こういうところはまとまった寄付をくださいました。さらに広く国民から寄付が集められまして、年配の人は80過ぎの人から、若い人は13歳、14歳の中学生からもありました。

これには寄付した人たちからのメッセージが寄せられることがしばしばでした。年配の人のなかには、「私たちの世代が起こした侵略戦争で、たくさんの方が犠牲になったことを反省しています」というようなメッセージが届きました。若い人たちからは、「私たちのお父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんの時代にこういうかたちでもって当時の若い韓国、台湾、フィリピン、その他の女性たちに対して人権を無視するひどいことをやったことについて、同じ日本人として恥ずかしく思い、自分と同じ年頃の人がそういうひどい目にあったということを思うと、自分も何かしてあげたいという気持ちになって、わずかですけどもお小遣いを寄付します」と、こういうメッセージもありました。正確な数字はわかりませんが、おそらく20万人を超える日本人が、この寄付に参加したと思います。私たちは

これは非常にうれしいことと言いますか、日本国民がこれだけ反応してくれたことについて、そういうことを真剣に考えている人がいるのだということが確認できたことを、ある意味ではうれしく思いました。

ただ、これはあくまでも国民の寄付であって、国民の気持ちであって、実際に慰安所を設置して、運営して被害者をたくさん強制的、あるいはだまして連れてきた、その責任者は日本であり、日本の軍隊であったわけです。ですから、先ほど被害者の立場にたってという発言がありましたが、被害者の方から見ると、それは日本国民のそういう気持ちは大変ありがたいけれども、自分たちの名誉を回復してくれるのは実際にその犯罪行為を行った日本ではないかと、こういう気持ちが強い、これは私たちすごく感じていました。法的な問題は解決しているというのは日本政府の立場でしたので、私たちはその問題は裁判所などで時間をかけて答えが出るかもしれないけれども、その答えが出るまでには年老いた被害者の方たちは健康を害し、亡くなったりしている人も出てきていましたので、そこまで待つことはできないという気持ちでした。

法的な問題の解決は並行して追求すればよい。他方で政府は道義的な責任は認めているのだから、その点について日本政府はきちっと対応してほしいというのが私たちの立場でした。日本政府は村山内閣、それ以後の内閣において政府の責任者がこの問題について触れ、深い謝罪の気持ちを表明してきました。基金の償い事業を受け取った被害者の方に対しては、その当時は総理大臣が代わりましたので、橋本総理の謝罪の手紙も付されました。私たちはそこまで政府が道義的責任を認めるならば、政府のお金を、お渡しするお金のなかに含めてほしいと、こういうことを強く要求しました。しかしながら、当時の大蔵省、いまの財務省ですが、大蔵省のお金の支出の仕方として、そういうかたちでの国のお金の支出はできない、この原則論が変わることはありませんでした。そこで私たちはそれならば償い金ではなくて、政府のお金で出せるかたちのお金を出してほしいということで、結局、医療福祉事業の実施というかたちでの予算の支出をしてもらいました。

こういうかたちで事業が始まりまして、いろいろな変化がありました。現在までに380人近い元「慰安婦」の方々、具体的には韓国、台湾、フィ

リピンなどの人たちに償い事業が行われました。この償い事業は始めてから5年間で終了するという予定になっておりましたので、これはすでに昨年で事業そのものは終了しました。こういうむずかしい批判があったということもありまして、私たちの認識では、韓国、台湾、フィリピンで、政府またはNGOが確認した生存中の被害者の方々の、およそ40%がアジア女性基金の償い事業を受け取られたというふうに理解しております。

しかし（韓国と台湾では）半分以上の方々はいろいろの事情から、とりわけ基金、日本政府に対する批判から、この償い事業を受け取っておられません。この点については、アジア女性基金はこれからも継続して活動していかなければならない、償い事業は終わりましたが、それで問題は終わっているわけではなくて、その人たちの今後、償い事業を受け取られた方も受け取られなかった方々にも、まだ今後私たちは関心を持ち続けていかななくてはならないという、そういう気持ちでいます。

それでは長くなりましたが、背景説明させていただきました。どうぞ。
中央大学大学院生 こんにちは。時間が少なくなってきましたので、少しいままでの議論とは違った観点から韓国の学生の皆さんに質問をしたいと思います。

それは1998年10月の小渕首相とキム・デジュン大統領の日韓首脳会談の結果、日韓共同宣言で発表された未来志向にもとづく成熟した日韓関係の構築という点です。この未来志向的な外交関係というのは、日韓両国が過去の不幸な歴史を乗り越えて和解し、日本人も日本が1910年以来朝鮮半島で行ってきた植民地政策により韓国の方々に与えた苦痛とか、損害という過去を直視し、真剣に反省し、お詫びしたうえで未来に向けて友好な関係を築いていくという関係です。

この1998年の宣言以来、日本と韓国の首脳会談の際には必ず歴史問題に言及し、この未来志向にもとづく関係を構築していくことが両国の首脳によって確認されてきました。その結果、現在の日韓関係は一般的には友好な関係にあると思いますが、先日のノ・ムヒョン大統領が訪日する直前に、私は日本人として恥ずかしいと思いますが、日本の衆議院議員による創氏改名に関する問題発言等があり、まだ日本には十分歴史を反省していない政治家もいますし、いままでの議論のなかで日本の若者が過去の歴史

について十分認識しているとは思っていません。むしろ僕は最近の傾向として未来志向という言葉が独り歩きして、過去の歴史を語らない、一種の隠れみのというか、日本のことわざで「臭いものにはふたをしろ」というのがありますけれども、そのような言葉に利用される恐れもあるのではないかという懸念を抱いております。

少し前置きが長くなりましたが、1998年の共同宣言で言われたような、過去の歴史を直視したうえで真の意味での友好的な未来志向にもとづく成熟した日韓関係を構築するために、韓国の学生の皆さまは、未来志向という考えをどのように理解されていて、今後、日本と韓国のあいだで、どのように友好的な関係を構築していったらいいかという、政策というか方法について質問をしたいと思います。

横田 それでは、この質問に対して、韓国側のどなたかのお答えを最後に、あとイー先生にきょうの午前のセッションをまとめていただこうと思いますので、どなたかいまの点について、未来志向の日韓関係についてどういうふうに受け止めておられるか…。

船越 きょう、さまざまな韓国の方たちいらしているので、女性ばかりに発言が多いかなと思っているので、男性の方にも聞きたいなと思っていますので、ぜひお願いします。

横田 ということですが、どうですか、いまの未来志向という日韓首脳の宣言についての韓国側の受け止め方ですね。

交流による信頼から新たな韓日関係

チョン・ Cholク 関東大学北朝鮮学科のチョン・ Cholクと申します。

今後の日韓関係について、私の個人的な意見を短くお答えしたいと思います。今後の日韓関係は北朝鮮の核問題とか東アジア、東北アジアの経済協力の問題から、今後よりいっそう関係の重要性が求められると思います。また日本は経済的に大国でありますし、国際社会の舞台でも多くの役割を担っていると思います。このような問題は日韓関係の渉外的な部分にもなりうると思いますが、今後、日韓関係の改善として重要なポイントになってくると思います。

日韓関係というのは、その感情的な問題にこだわっているだけでは決し

て解決されえない問題だと思えます。その日韓関係の改善のためには、韓国人の意識の変化というのが不可欠です。時代的な変化、また人々の変化にともなって、過去にこだわる、それだけではなくて未来的な利益を考えていく必要があると思えます。日韓関係が重要なイシューである以上、反日感情に自制心を抱きながら、信頼関係の構築に着目してみる必要があると思えます。日韓関係の信頼と協力という基盤が構築されれば、植民地問題についても円滑な解決というのが考えられますし、経済的な発展のみならず、北朝鮮の核問題などの安全保障問題についても、よい方向での解決が求められると思えます。

日韓関係の改善のためには、文化やスポーツイベントなどの交流事業を高めることも必要です。文化交流は若者のあいだでは非常に重要な接点となりうることです。若い世代の日本を眺める視点はポジティブな側面もあり、いい側面からとらえる、また憧れの対象としてみる側面もあります。文化交流は日韓関係の共感をつくってくれる1つの方法になると思えます。経済協力は両国の経済発展や、いろいろなプラスの側面があると思えます。日韓関係は長期的な変化というのが必要だととらえています。

以上、日韓関係について私の個人的な意見について述べてみました、ありがとうございました。

横田 まだいろいろなご意見があると思えますが、午後も議論が続きますし、お昼の時間、皆さんと一緒に食事してもらいますので、その機会にもまた意見交換ができると思えます。ここで午前のセッションのしめくりとして、イー・ウォヌン先生に簡単に議論をまとめていただこうと思えます。お願いいたします。

イー・ウォヌン 簡単に要約して整理してみたいと思えます。日本と韓国の学生たちが重要な歴史問題などについて議論した貴重な時間であったと理解しています。おたがいの違いについても確認できたし、共通点についても確認できました。

最も争点となった分野というのは安西さんのお話にあったように、政治問題と人権問題をどのように区分して扱うかということだったと思えます。韓国側の学生はやはり、いまだに民族的な感情論を吹き飛ばすことができ

ないという側面が見えてきました。しかし同時に、この問題について韓国側の声から、自らこの問題を克服すべきであるという声も出てきました。また経済、北朝鮮問題、政治問題など未来関係において積極的に取り組むべき課題についての意見も出てきました。歴史をあきらめるのではなくて、歴史を直視するがゆえに歴史以外のことにもとらえる、重視するという、ポジティブであり、また建設的な視点が見えてきました。

日本人の学生の皆さまの発表のなかにも、意見のなかにも非常に貴重なものがたくさんありました。「慰安婦」に関する知識や情報が限られているにもかかわらず、この問題を普遍的な人権問題としてとらえてくださった、そのようなことが共通的のうかがえたと思います。政府の対応について足りない問題などについて、自ら指摘してくださる、そのすぐれた、すばらしいポイントがあったと思います。

先ほど韓国側の発表にもありましたが、韓国人の学生は韓国人としてのアイデンティティが皆さまより強いと思います。したがって韓国人の方々が抱くイメージのなかには、日本人も一つ(のかたまり)であるというイメージが強いことです。日本人の意見のなかでもいろんな意見があり、また私たちと同じような意見をもっている方々もたくさんいるんだというのを自ら体験できればということで、非常に重要な場だと思っています。

歴史を建設的にとらえ解決への仕事

今後やるべき仕事はたくさんありますが、その仕事、作業は皆さまのお仕事であると理解しています。上の世代は問題をつくることはありましたが、問題解決はできませんでした。私は皆さまを信じております。きょうの発表、討論の内容をうかがうことから、私の信頼がよりいっそう高まったと申し上げます。歴史を避けようということではなくて歴史を建設的にとらえようという視点を、もう一度改めて確認することができました。

午後の討論を楽しみにしております、以上です。(拍手)

横田 大変短い時間のなかで午前のセッションの中身を適切にまとめてくださったイー先生に感謝いたします。最初に問題提起してくださった4人の学生、そしてそのあとの議論にいろんなかたちで参加してくださった学生諸君、それから発言の機会はなかったかもしれませんが、熱心に議論に

耳を傾けてくださった方、皆さんどうもありがとうございました。通訳をずっと続けられたキム・キョンモクさんどうもご苦労さま、ありがとうございました。(拍手)

それでは、これからお昼のことについて簡単にアナウンスをいたします。

イー先生と私と韓国の側で午後に発表する人と司会をする人、打ち合わせがありますのでちょっとこちらにあとで集まってください。日本の側も小出さんと久保田さんは残ってください。あとの人たちはお昼の時間を楽しんでいただきたいと思います。

1時半から午後のセッションがここで始まりますので、それまでにここへ戻ってきてください。それではどうもご苦労さまでした、ありがとうございました。(拍手)

《日韓学生のフォーラム》

日韓関係の現在・過去・未来

～新時代に生きる私たちの対話～

【午後の部】

韓国：

関東大學校 KWANDONG UNIVERSITY

西江大學校國際大學院 SOGANG GRADUATE SCHOOL OF INTERNATIONAL STUDIES (SGIS)

留学生（韓国、早稲田大学大学院）

日本：

中央大学、東海大学、津田塾大学、明治大学、杏林大学、早稲田大学

パネリスト：

韓国——（学科名の北韓は北朝鮮とした）

関東大學校（KU）

ユ・ジェヨン YU JAE YONG 北朝鮮（北韓）学科

イム・スミン LIM SOO MIN 北朝鮮学科

イー・ジウォン LEE JEE WON 北朝鮮学科 *提起

チョン・ミエ JUN MEE AE 日本語学科

ソ・ナムヒ SEO NAM HEE 行政学科

イー・キョンファ LEE KYUNG HWA 行政学科

ソン・ウギョン SONG WOO KYUNG 行政学科

チョン・チョルク JUN CHUL UK 北朝鮮学科

チェ・シンジュ CHOI SIN JU 北朝鮮学科 *提起

キム・ヒョンウ KIM HYUNG WOO 北朝鮮学科

西江大學校国際大学院 (SGIS)

シン・ジョンア SHIN JUNG A 国際関係学科 * 司会

イー・ヨジョン LEE YEO JUNG 国際関係学科

チョ・ヒョンジョン CHO HYUN JUNG 国際関係学科 * 司会

イー・ユハク LEE YU HAK 国際関係学科 * 提起

ハ・ヒジョン HA HEE JOUNG 国際関係学科

キム・ミンジュ KIM MIN JU 国際関係学科

チャン・テクファン JANG TEAK HOON 日本語学科

キム・ミンジョン KIM MIN JUNG 国際関係学科

留学生——

イー・ジョンミン LEE JUNG MIN 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

ナ・キョンソ LAH KYUNG SOO 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科 * 提起

日本——

大原 朋子 OHARA TOMOKO 津田塾大学 国際関係学科

西田 翔子 NISHIDA SHOKO 津田塾大学 国際関係学科

武田 麻衣 TAKEDA MAI 津田塾大学 英文学科

古口 忠志 KOGUCHI TADASHI 明治大学 政治経済学部

森 亮喜 MORI AKINOBU 明治大学 政治経済学部

白井 一生 SHIRAI ISSEI 明治大学 政治経済学部 * 提起

鬼原 民幸 KIHARA TAMİYUKI 明治大学 政治経済学部

久保田 有香 KUBOTA YUKA 中央大学大学院 法学研究科 * 司会

小出 みずほ KOIDE MIZUHO 中央大学 法学部 * 提起

安西 元 ANZAI GEN 中央大学 法学部

井原 久美子 IHARA KUMIKO 中央大学 法学部

中村 明子 NAKAMURA AKIKO 中央大学 法学部

若島 鉄平 WAKASHIMA TEPPEI 東海大学 文学部日本文学科

金子正幸 KANEKO MASAYUKI 東海大学 理学部数学科

小野寺 啓子 ONODERA KEIKO 杏林大学大学院 修士課程国際協力
研究科

関口 悟 SEKIGUCHI SATORU 早稲田大学大学院アジア太平洋研究
科

アドバイザー：

李元雄 LEE WON-WOONG

関東大学校教授 KWANDONG UNIVERSITY, SCHOOL OF LAW &
POLITICS、西江大学校、同大国際大学院（政治学博士）。コロンビア大学
東アジア研究所、東京大学法学部客員研究員歴任

饗庭孝典 AEBA TAKANORI

早稲田大学法学部講師。日韓文化交流会議委員、日韓文化交流基金評議
員、東アジア近代史学会副会長。1978～81 NHK ソウル特派員 元NH
K解説主幹

横田洋三 YOKOTA YOZO

中央大学法学部教授、国連大学学長特別顧問。国連人権促進小委員会委員

伊勢桃代 ISE MOMOYO

アジア女性基金専務理事・事務局長。1969年より国際連合NY本部、人事採用・
研修部長、国連大学事務局長。1997年 退職しアジア女性基金

総合司会(山崎玲子 YAMAZAKI Reiko) 皆さま大変長らくお待たせいたしました。間もなくフォーラムを開会いたしたいと思います。ここでは同時通訳で行ないます。お手元にありますレシーバーのチャンネル、日本語は1、韓国語の場合は2チャンネルに合わせてお使いになってください。

それでは開会させていただきます。皆さま、こんにちは。本日はお忙しい中お越しくださいませ誠にありがとうございます。ただいまより「日韓学生フォーラム“日韓関係の現在・過去・未来”～新時代に生きる私たちの対話～」を開会いたします。

私は本日進行を務めさせていただきますアジア女性基金の山崎と申します。よろしくお願ひいたします。

それではまず開会にあたりまして、主催者であります財団法人女性のためのアジア平和国民基金の事務局長兼専務理事、伊勢桃代がご挨拶を申し上げます。

伊勢桃代 ISE Momoyo 伊勢でございます。きょうは、会場の皆さま、ようこそお越しくださいました。本日この集まりのために韓国から18人の大学生が来てくださいました。関東大学と西江大学の学生の方たちです。また、韓国からの留学生がお二人です。ようこそおいでくださいました。こうしておいでいただき、お会いできることを心からうれしく思い、感謝いたします。

それから、16人の日本の大学生が、おたがいの思いや考えを話し合いたいという気持ちから、ここに参加してござっております。津田塾大学、明治大学、中央大学、東海大学、杏林大学、早稲田大学から参加していただいております。本日の主役はこれらの若い、これからの世界を担っていく方たちです。また会場には、いろいろな大学の方たちが来ておられると思いますので、のちほど意見交換、また質疑応答の時にはどうぞ活発に参加をしてください。

こういうフォーラムをもつ機会を与えてくださいましたイー・ウォヌン教授、また横田洋三教授に心から感謝申し上げます。

韓国の学生、そして日本の学生が直接顔を合わせ、言葉を交わす機会をもてることは、それだけで日韓が確かな足音とともに近づいているという

証しではないかと思います。

周知のことだと思いますけれども、アジア女性基金は1995年7月に設立されました。その目的としては、かつての戦争の時代に日本軍の慰安所に集められ、将兵に性的な行為を強いられた「慰安婦」の方々に対し、道義的責任を認め償いをする事。そしてもう1つの目的は「慰安婦」問題のようなことを再発させない決意のもとに、現在も続く女性に対するさまざまな暴力についての予防、未然防止、対応、研究、調査、啓発をすることです。こういった暴力のない世界を構築するための施策と対応、そしてアジア近隣の皆さんとの交流と友好を進めるさまざまな活動を、アジア女性基金は行っております。

市民一人ひとりから始まる'世界'

日本と韓国が一緒になり、現在から未来につなぐ歩みは、遅々としているとも見えますけれども、若い人々のあいだでは、思ったより急速に進んでいるのかもしれない。韓国と日本が果たす平和のための役割は、アジアという地域においても国連などの場においても、ますます重要になると思います。その意味で、私は、若い人たちが理想を掲げ、それをどんどん実行していける社会を一日も早く実現したいと、半ばあせりにも似た気持ちでおります。

きょうは“エリザベス・ローズ”と名づけられた会議室を使わせていただいております。このエリザベス・ローズさんという方は、もう1950年ごろから「国連大学」という構想をもたれ、みんなが、とくに若い人たちも一緒に集まって平和に貢献できる人材を育てたいと考えておられました。お1人の、ローズさんという方の気持ちがこのようにみんなの支持を得て、この国連大学がつけられましたことを思うと、皆さんが1人だと思われても、その1人の力が、やがて市民社会を動かしつつ大きく世界を変えていく力になると思うのです。

2003年のこの日、東京で初めて出会った皆さん——学生たちは、やがて10年経つと、おそらく社会の中核で働いておられると思います。この日の出会いが長く続く友情の基になればと思います。またこの記憶が日韓のためというだけでなく、いろいろな意味で広く世界の人々のために生かされ

ていくであろうことを期待しております。

いま世界では、生まれた時からただ1日さえ平和の日を知らないという人たちがますます増えております。また貧富の差も大きくなる一方です。皆さんがこうやって話し合いを続けながら、身近なところから一緒に平和をつくり希望を実現していく、そういう始まりの場であるように望んでおります。きょうはどのような思い、考え、意見の交換がなされるかを本当に楽しみにしております。よろしく願いいたします。本当にご参会ありがとうございました。

総司会(山崎) それでは、きょうこのテーブルについてくださっております大学生の皆さんの自己紹介に入りたいと思います。時間の制約もありますので、お名前、大学名と、訪日経験、訪韓経験にふれて簡単に自己紹介をしていただければと思います。

チョ・ヒョンジョン (CHO Hyung-jung) こんにちは。韓国からまいりました西江大学国際大学院で国際関係学を専攻しています。日本には初めてまいりました。お会いできてうれしく思います。

シン・ジョンア (SHIN Jung-ah) こんにちは。韓国の西江大学国際大学院に在学しているシン・ジョンアと申します。日本には初めてまいりました。よろしく願いいたします。

久保田有香 (KUBOTA Yuka) 中央大学大学院で国際法を専攻している久保田有香と申します。韓国にはまだ行ったことはありません。よろしく願いいたします。

鬼原民幸 (KIHARA Tamiyuki) こんにちは。明治大学政治経済学部で鬼原民幸と申します。韓国にはまだ行ったことはありませんが、本日こういう機会をもて大変うれしく思います。どうぞよろしく願いいたします。

チョン・チョルク (JUN Chul-uk) こんにちは。関東大学3年生のチョンと申します。日本には初めてまいりました。このようにお会いできてうれしく思います。

イー・キョンファ (LEE Kyung-wha) こんにちは。関東大学行政学科2年生です。日本には初めてまいりました。よろしく願いいたします。

キム・ヒョンウ (KIM Hyoung-woo) こんにちは。関東大学法学部2年生のイー・ヒョンウと申します。日本にまいりましていろいろな方と出会い、そして一緒にお食事などもできたことをうれしく思います。

ソン・ウギョン (SONG Woo-kyung) こんにちは。関東大学行政学科2年生のソン・ウギョンと申します。日本には初めてまいりました。このような場を通じて、いろいろな方に会えることをうれしく思います。

関口悟 (SEKIGUCHI Satoru) 早稲田大学アジア太平洋研究科、国際関係修士課程の関口悟と申します。韓国はまだ一度も行ったことがございません。よろしくお願ひします。

小野寺啓子 (ONODERA Keiko) 杏林大学国際協力研究科の修士課程におります小野寺啓子と申します。韓国には何度か行っていまして、1度は1年半ほど住んでおりましたので、韓国語のほうもできます。よろしくお願ひします。

森亮喜 (MORI Hironobu) こんにちは。明治大学政治経済学部、森亮喜と申します。大学では異文化間コミュニケーションのゼミに所属しております。韓国には1度も行ったことがございません。きょうはよろしくお願ひいたします。

イム・スミン (LIM Soo-min) こんにちは。関東大学で日本語を勉強しております。日本には初めてまいりました。よろしくお願ひします。イー・キョンファと申します。

イー・ジウォン (LEE Jee-won) こんにちは。関東大学のイー・ジウォンと申します。日本には初めてまいりました。いろんな日本の大学生とお話できますことをうれしく思います。よろしくお願ひします。

チョン・ミエ (JUN Mee-ae) こんにちは。関東大学で日本語を勉強しておりますチョン・ミエと申します。よろしくお願ひします。

武田麻衣 (TAKEDA Mai) 津田塾大学英文学科4年の武田麻衣と申します。専攻もみなさんと違いますし韓国にも行ったことはないんですが、きょうはどうぞよろしくお願ひいたします。

大原朋子 (OHARA Tomoko) 津田塾大学国際関係学科3年の大原です。韓国にはまだ行ったことがないんですけど、今月の下旬に初めて行くこととなります。よろしくお願ひします。

白井一生 (SHIRAI Issei) 明治大学3年の白井と申します。韓国語を勉強しているので、ちょっと韓国語で自己紹介してみたいと思います。「皆さん、こんにちは。私は明治大学政治経済学部にて在学しております白井一生と申します。皆さんにお会いできてうれしく思います。ありがとうございます」。

中村明子 (NAKAMURA Akiko) 中央大学4年の中村明子と申します。こんにちは。このような機会に参加できてとてもうれしく思っています。韓国には行ったことがないんですけども、よろしく願います。

イー・ヨジョン (LEE Yeo-jung) こんにちは。西江大学国際大学院にて在学中のイー・ヨジョンと申します。専門は国際関係学です。日本には初めてまいりました。本日はよろしく願います。

キム・ミンジュ (KIM Min-ju) こんにちは。西江大学国際大学院にて在学中のキム・ミンジュと申します。専門は国際関係学。そして日本には、2年前大阪に来たことがあります。日本について知りたいと思ひ、1年間日本語も勉強したことがあります。よろしく願います。

ソ・ナムヒ (SEO Nam-hee) こんにちは。韓国からまいりました。日本には初めて。そして今回をひとつの機会として、いろんなことを学ばせていただきたいと思ひしております。関東大学1年生です。日本語を勉強しようと思ひしております。

キム・ミンジョン (KIM Min-jung) こんにちは。西江大学、国際大学院で、国際関係について勉強しております。日本には初めてまいりました。昨日、地下鉄に乗ったのですが、非常に馴染み深いような印象がありました。日本についてあまりにも無知だったということを改めて感じさせられました。よろしく願います。ほかの友達もそうなんですけれども、日本の漫画あるいはアニメなどを通じまして、日本にはいろいろと触れてまいりました。しかし今回の訪問を通じましてさらに深く日本について勉強させていただきたいと思ひます。ありがとうございます。

西田翔子 (NISHIDA Shoko) 津田塾大学国際関係学科3年の西田翔子です。韓国には私も今月の末に行く予定でいますので、いろいろ教えてもらえたらと思ひます。よろしく願います。

古口忠志 (KOGUCHI Tadashi) 明治大学3年の古口忠志と申します。

専攻は異文化ビジネス論です。韓国にはまだ行ったことがありませんが、いろいろなことを知りたいと思います。よろしくお願いします。

井原久美子 (IHARA Kumiko) 中央大学法学部政治学科3年の井原久美子です。韓国には今年の春にソウルに旅行に行きました。きょうはよろしくお願いします。

キム・ヒョンウ (KIM Hyoung-woo) こんにちは。関東大学3年生のキム・ヒョンウと申します。楽しい思い出をたくさんつくって帰りたいと思っています。よろしくお願いします。

ユ・ジェヨン (YU Jae-yong) こんにちは。関東大学北朝鮮学科3年生のユ・ジェヨンと申します。日本には初めてまいりました。皆さんにお会いできてうれしく思います。

チェ・シンジュ (CHOI Sin-ju) こんにちは。関東大学北朝鮮学科3年生のチェと申します。日本には初めてまいりました。よろしく願いましたます。

金子正幸 (KANEKO Masayuki) 東海大学理学部数学科の金子正幸です。韓国には1年前に短期留学したことがあります。よろしくお願いします。

若島鉄平 (WAKASHIMA Teppei) こんにちは。東海大学日本文学科の若島鉄平です。韓国には3回ほど行きまして、2000年に1カ月間短期留学をして、2001年に3泊程度の旅行をして、そして去年は1年間交換留学でハニャン(漢陽)大学のほうで勉強しました。まだ韓国についてわからないこと、知らないことがたくさんありますので、きょうはたくさん勉強していきたいと思います。よろしくお願いします。

イー・ユハク (LEE Yu-hak) こんにちは。韓国からまいりました。西江大学国際大学院国際関係学科を専攻しております、イー・ユハクと申します。日本には初めてまいりましたが、日本と韓国人は東洋人ですし、また顔も似ています。きょうこういった対話の場を通じまして日韓関係がさらに発展してほしいと考えております。きょうお会いできてうれしく思います。

安西元 (ANZAI Gen) 中央大学法学部、国際企業関係法学科4年の安西と申します。国際法を勉強していて、韓国に行ったこともないんですけども、きょうはこうした機会を与えられたので、積極的に発言していきたい

いと考えています。よろしくお願ひいたします。

小出みずほ (KOIDE Mizuho) こんにちは中央大学法学部政治学科4年の小出みずほと申します。韓国へは、大韓航空で乗換のときに飛行場だけ行ったことがあります、外に出たことはありません。きょうはこの貴重な機会を生かして、いろんな意見交換ができたらなと思います。よろしくお願ひします。

ハ・ヒジョン (HA Hee-Joung) 西江大学国際大学院、ハ・ヒジョンです。よろしくお願ひします。

チャン・テクン (JANG Teak-hoon) 西江大学院、チャン・テクンです。日本語を学んでいます。

総合司会 (山崎) どうもありがとうございます。実はきょう、留学生の方を2人お迎えしております。ご紹介が遅くなりました。韓国から日本の大学に勉強に来られているお二人に簡単に自己紹介をしていただきます。

ナ・キョンス (LAH Kyung-soo) ご挨拶遅れました。日本と韓国は共通点が非常に多い。日本はいま梅雨ですけれども、韓国でも雨がよく降っていますね。ナ・キョンスと申します。早稲田大学大学院で国際関係学を専攻しております。お会いできて光栄です。

イー・ジョンミン (LEE Jung-min) 日本語で自己紹介させていただきます。早稲田大学大学院のアジア太平洋研究科1年のイー・ジョンミンと申します。日本に来てから5年経っています。よろしくお願ひいたします。

総合司会 (山崎) 皆さん、どうもありがとうございます。続きまして、基調提起といたしまして、韓国の関東大学教授のイー・ウォヌンさんよりお話をいただきます。

イー・ウォヌン教授は北朝鮮学がご専門で、1999年には東京大学法学部に客員研究員として1年間日本に滞在されたこともございます。またこの『「慰安婦」問題とアジア女性基金』という本を韓国語に訳されました。この韓国語版は会場入り口のテーブルにも展示してあるので、よろしければごらんください。

それではイー・ウォヌン先生、よろしくお願ひいたします。

「歴史は、過去と現在の対話」—新しく解釈され発展する

イー・ウォヌン（LEE Won-woong） 皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました関東大学北朝鮮学科のイー・ウォヌンと申します。北朝鮮学科ですけれども、専攻は国際NGO問題であります。この間、日本に対してそれほど多く勉強したこともありませんけれども、人権問題について勉強するなかで、日本と韓国というのはこれから一隻の同じ船に乗って進んでいかなければならない、そういった運命的な結合体であるというような感想をもつようになりました。いつの頃からか私の見かけも日本人に似ているということで、友達も言い始めたんですけども、私も日本人みたいに見かけも変わってきたのではないかというふうに言われております。きょう私がお話し申し上げるのは、あまりに長い話をしてもいけないと思いますので、短く基調演説ということで短くお話を申し上げたいと思います。

アジアにおいて最も繁栄している国、最も重要な隣国である日本と韓国は、数千年間にわたって近しい関係を有してきました。言語はもちろんのこと、両国の文化財、あるいは箸を使用するという、そういった習慣、また苦難と困難を克服して経済的な繁栄を実現した強靱な精神力——こういったすべての点で日本と韓国人は共通点を非常に多く抱えているということが出来ます。

しかし今後の日韓、韓日両国関係を展望するならば、それほど楽観的ばかりではられません。すなわち、歴史の問題というものが両国の関係の発展を阻害しているのです。最近、日本のある政治家は韓国人の「創氏改名」について、「韓国人自らが望んで行ったことだ」と発言しました。また一方で韓国人らはまるで日本がまた再び軍国主義へと移り、韓国を侵略するであろうと、そういった不安感を強くもっております。このように、いまま両国のあいだには誤解や不信、そういったものが非常に多く残っているのは事実であります。

こうしたすべての誤解や不信の根源は、両国の不幸な近代史の記憶に基づいています。すなわち、すでに死んでしまった過去が、生きている現在や未来の発展を妨害しているということでもあります。英国の有名な歴史家、E. H. カール*は「歴史というのは過去と現在の対話である」という有

*Edward H. Carr

1892~1982 イギリスの外交官で国際政治学者。国際政治、ロシア革命史を研究。『危機の二十年』『ソ連史』、『歴史とは何か』（清水幾太郎訳、岩波新書、1962）

名な言葉を残しております。そのとおりだと思います。人間の歴史は流れる水のように、単に流れていく事件としては終わるものではありません。歴史というのは常に新しく解釈され発展しています。また歴史は、博物館の中で死んでいる化石ではなく、現存するわれわれの認識世界の一部でもあります。

E. H. カール教授の歴史に対する端的な教えというものは、未来を阻害している歴史の暗い足かせを打開することのできる道をわれわれに暗示しております。すなわち歴史というのは、それ自体で存在している異物ではなく、われわれの認識体験の一部としていくらかでも変化が可能なものがあります。死んでしまった過去はわれわれが考えを変えることによって、むしろ新たな未来を開いていく鍵ともなりうるのです。

「雨降って地固まる」という言葉が日本にあります。韓国にもあります。そういった言葉のように多くの日本の軍人、あるいは無垢な市民たちが、国家主義の美名のもとに死んでいきました。日本が追求していた戦争に動員されて亡くなっていった多くの韓国人、朝鮮人たちもそのなかに含まれております。

一方、自力で解放、独立を達成できなかった韓国は、ソ連とアメリカによって国土が分断されてしまい、1950年には北朝鮮の革命的民族主義勢力によって行われた戦争によって、同族同士がおたがいに殺しあうという悲惨な戦争を経験することになりました。

こうした歴史は、われわれに多くの新たな負担、または責任を残しております。19世紀からこれまで100年を超えてつづいている東アジアの国家主義戦争のなかで、被害を負った多くの市民たちがいまも補償、あるいは謝罪を受けられずに亡くなっていつているわけです。多くの市民はおたがいの事実を知らされないまま、誤解と不信感をもちつづけております。

では、こうした不幸な歴史を未来に向けた鍵へと、あるいは繁栄に向けた教訓として変化させる力はどこから出てくるのでしょうか。私は数年前に東京大学でしばらく勉強しながら、アジア女性基金の活動について知ることになりました。日本を代表する良心的な知識人が歴史問題を解決するために、時には政府と対立しながらも多くの努力を払ってきたという事実を知るに至りました。しかし遺憾なことに、韓国の大部分の市民たちは日

本の市民運動家たちのこうした努力に対してまったく知りません。私はお恥ずかしい気持ちをもちながら、アジア女性基金の努力に関する本を韓国語に翻訳し、韓国の学生たちに紹介しました。きょう、私が指導する18人の学生たちが、その本を読んで感じた感想を日本の若い学生たちと率直に話し合うためにこの場に集まっております。

私は歴史というのは克服することができるかと確信しております。歴史は一つの認識であり、真実と未来に向けた熱情に燃える、まさに皆さんのような若い世代の努力によって変化し発展するものであります。われわれの先の世代が行った間違いについて、皆さんが解決しなければならない荷を負っているということはまさに遺憾なことであります。

しかし一方から考えると、皆さんこそが21世紀のアジアを、戦争と葛藤ではなく繁栄と平和の時代へと導いていく、そうした人類史的な使命を担った誇らしい世代であるということも言えます。まず出会って対話をしましょう。おたがいの間違いを批判することも重要ですが、おたがいの長所を率直に認めることも重要です。私がこれまでに会った日本人たちは、本当に正直で情にあふれた人たちでした。同じように、韓国人は、非常にダイナミックで人情にあふれていると、そういう長所をもっています。時には耳に痛いことも話すかもしれませんが、本当に重要なことは、われわれが共通した未来をもっているという意識、そしてアジアと世界を共に導いていかなければならないという責任感であります。

過去の影が未来を遮らないよう真実と尊重から韓日関係を

未来の主人公は、まさに皆さんであります。どうか、きょうは、おたがいに話したい話を十分に話して、決して過去の影が未来をさえぎることのないように、そういった信念、過去の世代がもたらした過ちを決して繰り返してはならないという決心、また報復や歪曲ではない真実と尊重から新たな韓日関係を提示していくという原則を、もう一度心に刻む必要があると思います。21世紀は、韓国と日本がともに世界の歴史のなかで飛躍することのできる重要な時代であります。韓国は半世紀を越えた分断体制を克服し、統一した民族国家を打ち立てなければなりません。

一方、日本は、世界2位の経済大国として、またアジアと世界の指導的

な国家として飛躍しなければなりません。今日両国の関係発展は、今後韓日・日韓両国が共同運命体としておたがいに依存しているということを明確に示しています。韓日一日韓ワールドカップを成功裏に開催し、また情熱的に開催した共同の歴史が、戦争と狂気の歴史を追い払わなければなりません。そして両国の健康で良心的な市民勢力と夢をもった若い世代が手に手を取って進んでいけば、両国間の不幸な歴史は新たな未来の歴史の土台として貴重な教訓としての価値をもつことになると思います。歴史は常に新たに書き加えられていくものです。

ありがとうございます。

[セッション1] ——

総合司会（山崎） それではこれからセッション1を始めたいと思います。ここからは、日韓の学生による共同司会で進めてまいりますので、よろしく願いいたします。人選に関しましては事前にこちらのほうでさせていただきましたので、ご了解ください。

はじめに、セッション全体を通じまして、アドバイザーとしてご同席いただきます皆さまをご紹介します。

イー・ウォン先生は先ほどご紹介いたしました。そのお隣に饗庭孝典さんです。早稲田大学法学部講師、日韓文化交流会議委員、日韓文化交流基金評議委員、そして東アジア近代史学会副会長でいらっしゃいます。また1978～81年NHKソウル特派員、またのちにはNHK解説主幹をお務めになりました。昨年度までアジア女性基金の運営審議会委員も務められました。

それから、横田洋三さんをお迎えしております。のちほどおみえになりますが、簡単にご紹介だけさせていただきます。中央大学法学部教授で、

国連大学学長特別顧問でもいらっしゃいます。また国連人権促進小委員会委員、アジア女性基金運営審議委員長も務めていらっしゃいます。のちほどのセッションから加わっていただきます。そして、先ほどご紹介いたしました伊勢桃代でございます。

それではこれよりセッション1「慰安婦問題と日韓関係～私たちはこうみる」を始めたいと思います。では、司会の皆さん、よろしく願いいたします。

司会・鬼原 では、セッション1を始めたいと思います。最初に、韓国からいらした学生と中央大学の学生のあいだで、午前中にインフォーマルなものですが、とても活発な論議をもちました。その内容を、最初に韓国の代表の学生1人と、あと日本からの代表の学生1人に発表してもらいたいと思います。

では最初に、韓国側の代表のイー・ジウォンさんに要約を話していただきたいと思います。お願いします。

イー・ジウォン 「慰安婦」問題と日本の市民運動ということで、「慰安婦」問題を見るさまざまな視点、被害者と加害者、女性、贖罪の考えをもつ日本の男性と、そうでない日本の男性のさまざまな声が存在するという事実を知った。感情的に偏重していったこういった問題について、さまざまな角度からみることができるようになった。

日帝は戦争を準備し1930年代から40年代、植民地下で女性たちを動員し、日本の軍人の奴隷とした。国家が1つの政策として計画し、体系的に女性の性搾取を行ったという点、その規模が世界的に例のないそういった日本軍すべてが使用したほど膨大な規模であったという点で、この「挺身隊」の問題というのは世界でその例を見ることができない組織的な犯罪であった。

終戦後儒教的な家父長制のもとで、加害者も被害者も、この問題は歴史のなかで埋もれてしまった。1980年になって、韓国の女性団体において提起されて以降、アジアの女性団体と人権団体が積極的に加わり、この問題解決のための運動は国際的なものとなった。50年が過ぎたなかでこの問題が表面化したのは、何よりも人権に対する認識、女性の人権に対する意識が強まったからである。

「慰安婦」問題—日本市民の募金にショック

この運動の目標は被害者の侵害された人権、そして隠蔽され歪曲された歴史的事実を正しくし、明確にすることによってこういったことが再発しないことが重要である。現在、自らのまちがいにに対して謝罪しようという動きが起こっている。日本の戦争を知らない若い世代が「挺身隊」という先の世代の蛮行に対して謝罪する心から、その額には関係なく募金をしているという事実は非常にわれわれにとっても大きなショックであった。1人の韓国人として「慰安婦」問題の解決のために、当事者でありながらこの問題に対して無関心であった自身を恥ずかしく思う。

われわれは平素から民族主義だと思っているし、日本に対してあまりよい感情をもっていないが、その感情が正確な根拠のない群集心理的かつ漠然とした感情であったということも悟った。現在韓日間で国際法上の問題として争いがあるものの、法的用語を借りておたがいの国民感情を競わせているという委任に過ぎないというふうに思う。そんなあいだにも、社会的な蔑視のもとに羞恥心、病弱、貧困を背負った身で苦難の人生を送るこうした高齢の元「慰安婦」女性たちは、「慰安婦」という刻印を押されたまま世の中に背を向けて生きていらっやいます。

戦争はずいぶん昔に終わりにになりましたけれども、その傷は癒されることなく、彼女たちの胸中に残り、目に見えない暴力のなかでさらに深く傷ついている。私たちはいつまで色眼鏡をかけたまま日本を見るのであろうか？ 日本の一市民として「慰安婦」女性に対する償いの気持ちから基金に寄せた純粋な日本市民たちの心を、どうしてねじ曲がった目で見つづけるのだろうか？

基金に参加した日本市民たちは、政治家でも権力者でもない平凡な人々である。彼らはただ「慰安婦」の問題を大局的に解決しようと思って、国家としての法的責任の回避に加担するために基金に参加したのでは決していない。彼らはただ「慰安婦」の女性に心から謝りたいという純粋な気持ちで基金に参加した。どうして私たちはそのような人々の心を顧みず、感情的な争いに時間を浪費しなければならないのか。なぜ国家の謝罪のみを要求しながら、彼らの純粋な心からの謝罪を色眼鏡を通して見るのか。

もちろん国家の謝罪と補償を軽視するという事ではない。しかし、そ

うした形式的な補償ではなく、日本の国民一人ひとりの悔い改める気持ち、そちらのほうがいっそう価値のあることだと思う。戦争を知らない世代が心から謝罪し、償う気持ちで私財から寄付を行うこと、これこそ真に意味のある補償である。こうした1人1人の真心が集まれば、日本政府の態度も必ずや変化するというふうに信じている。そして私たちの態度も変えなければならない。広い心と視野でこの問題と見つめ解決しようと努力しなければならない。韓日両国民の真心が通じ合ったとき、この問題は解決されるだろう。

これからは感情の争いのなかに置き忘れられてしまっている当事者の皆さんが、無事平穏な余生が送れるように考えなければならない。どこでも丁重に受け入れて安らかに生きていけるようにしなければならない。そうしてこそ彼女らの傷ついた身と心を多少なりとも癒すことができるだろう。ありがとうございました。

司会(日本) つづきまして日本側の小出さんに、午前中の議論の内容をまとめていただきたいと思います。

「慰安婦」問題は政治問題か人道的問題か

小出 韓国の側と日本の側が2人ずつ「慰安婦問題とアジア女性基金」という、先ほどご紹介にあった本をもとに感想を述べたあと、みんなでディスカッションをするという形式をとりました。

主な論点として出てきたのが、「慰安婦」問題を政治問題としてとらえるのと、人道的問題としてとらえる、2つのとらえ方があって、その2つを混同してはならないというような意見と、逆にその2つをバランスをとりながらみていかなきゃいけないという意見があったのと、おたがいの教育の違いであるとか認識の違いというもの、教育制度、どういうふうに歴史のなかに位置づけているかということからきているのではないかということが言われていました。

どうしても韓国側は自分たちの民族的な意識が強いということで、政治問題化をしてしまいがちである。民族的とらえ方を払拭できないという側面がある一方で、日本の学生としてはそこまで日本という意識をもっていないのではないかということも言われていました。おたがいから出てきた

意見として、イー先生が最後にまとめていただいたときに、ポイントとして挙げてくださったのは、どちらからも自国側が変わらなければいけないという意見が出たことがすばらしい意見だったと思います。

中長期的な視野で「慰安婦」問題は解決しなければならないと言われていましたが、一方で被害者の方々が人生残りわずかであるということで、被害者の方々へはより短期的なアプローチも必要ではないかということも言われました。

おたがいにより考え方の違いであるとか、とらえ方の違い、認識のちがいであるので、今後より信頼関係を築いていくためには、文化的交流やイベントなど交流を拡大していくべきだ。それを通して信頼関係の構築をしていくべきだということ。感情論に陥ってはいけないということも出てきました。

私個人の感想としては、比較的建設的な意見が出ていたので、あまり感情的な意見というよりも建設的におたがいどうしていくべきかということ、未来を見据えたいうで、先ほどイー先生がおっしゃっていたような、歴史を避けるのではなく、より未来に向けておたがい歩み寄っていきこうというような意見でまとまったと思います、午前中は。以上です。

司会(日本) 大変ポイントをうまくまとめてくださったと思います。ありがとうございます。それではセッションに入って、ディスカッションを始めたいと思います。どなたかいまのまとめに直接関わったことでなくてもかまいません。「従軍慰安婦」問題と日韓関係についてご意見のある方、どうぞ。手を挙げてください。気軽に、どうぞ。

司会(久保田) まずは韓国では「慰安婦」の問題は、どのようなかたちで皆さん教えられたり、聞いたりしているのかをまず教えてほしいです。

司会(韓国) 発言者いらっしゃいますか？ 誰かいまの質問に答えてくれる人いませんか？

午前中のセッションで似たような話が出ました。

歴史の教科書では日本の植民地時代について、時代を追ってずっと記述があります。抗日闘争に関連する事柄が中心です。「慰安婦」問題、あるいは「挺身隊」問題についてはあまり多くのページを割いていません。私たちは間接的にこの「慰安婦」問題を知ることになります。新聞とかマスコ

ミを通じて知ることになりました。つまり学校教育ではなくマスコミを経て、マスコミを通じてこの問題に触れることになります。そのようにして、民族の問題とかプライドの問題として、韓国人のたはこの「慰安婦」問題をとらえている傾向にあるのではないのでしょうか。

司会(日本) 補足のような意見はございませんか。よろしいでしょうか？

韓国の学生(男性) 簡単な質問ですけれども、日本のほうでは、「慰安婦」問題に関してはどういう教育を受けているのか、それもちょっと紹介していただきたいです。

司会(日本) いまの問題に、日本側ではどうなっているのかという質問が出ました。午前中にもこの問題について少し触れたかと思うんですが、どなたか日本側の方、説明してくださる方いらっしゃいませんか？ どうぞ。

日本の歴史学習は暗記型で感情も入らない

日本の学生(男性) 僕は大手の予備校の日本史の講師もしたことがありますけれども、日本の歴史の勉強というのは暗記型というか、入試に向けてのシステムで、こうしたことの方というよりも、いかに時代の流れを暗記するとか、そういうことに非常に重点を置いていて、感情とかそういうものをまったく感じさせないような授業を取り入れるように指示されているので、そういうところが、いまこうした問題をなかなか日本の学生がうまくとらえきれない原因だと思います。

司会(日本) 日本側から補足のようなものございませんか？

日本の学生(男性) 私が最初に「従軍慰安婦」問題というものを知ったのは、先ほど韓国の学生が誰かおっしゃいましたけれども、新聞とか、それからニュースとか、そういったもので知りました。はじめその問題のことを知ったときは、ものすごいショックを受けました。私たちの祖父の世代がなぜそんなことをしてしまったのか、どうしてそんな恥ずかしいことをしてしまったのか、私は祖父の代を軽蔑するようになりました。

しかし、ニュースや新聞で言っていた、そういった報道にも反対意見というのがございまして、私はそちらのほうにも目を向けてみました。すると、さっきの韓国人側の学生がおっしゃっていたように、午前中の協議の話がございましたけれども、まず「挺身隊」という言葉が使われましたけ

れども、挺身隊というのは日本人や朝鮮人も含む女性が、工場などに勤労働員されていたということ、それを挺身隊と呼んでいたわけです。決して挺身隊＝「従軍慰安婦」ではないということを知りました。なぜそのような誤解が生じてしまったのかということも知りました。それは当時植民地時代に、挺身隊という名前で日本人に募集をされると、「従軍慰安婦」にされてしまうという噂がたったということです。

それから、日本軍はいわゆる「慰安婦」のために女性を強制連行したと、そういうのが一応通説になっておりますけれども、歴史的文書、そういったものに重点をおいて調べると、そういった事実はないという見方もあるということを知りました。そしてその「従軍慰安婦」がいたという、強制連行された人がいたというその根拠になったものが、すべて被害者側の証言*、それを基にしているということも知りました。では、その証言というのは被害者から、被害者の立場だけで語られるべきものなのでしょうか。それは反対側の加害者のほうにも声を傾けるべきだと思います。すると、そんなことをしたという証言は一切なく、「従軍慰安婦」という言葉をつくったのも実は日本の小説家なのです。だから、私たちはもっといろんな双方の意見を取り入れながら、もっと認識を深めていかないといけないと思っております。以上です。長くなりました。

小出 すみません、いまの発言、被害者側からの証拠しか出ていないということに関してはちょっと間違いがあると思うので、もしよかったら、アドバイザーの先生方から事実関係を、私個人としては証言以外にも証拠の文書が出てきていると思うんですけども、お願いします。

司会(日本) ここでアドバイザーの先生方のなかから、もし事実関係についてご存じの方がいらしたら、ご意見いただければと思います。日本側からの証言というものは、事実関係の証拠として挙げられていますでしょうか？

伊勢 あとからイー先生、饗庭先生にも補足していただけるとありがたいんですけども、私から少しお答えします。92、93年までに日本政府側がいろいろと調査をしております。そしてその調査の結果、こういう事実があったということを認めたとうえで、この「慰安婦」問題をどうするかということになって、そこからアジア女性基金を設立していくという経過が

* 証言・「慰安婦」関係政府調査

1993年8月政府は調査結果とともに官房長官談話。調査は政府機関の公文書等資料、団体や研究者の資料そして聞き取り結果を踏まえている。聞き取り対象は総督府関係者、軍人、慰安所の経営者、慰安所近くの住人ら100人以上、その上で元「慰安婦」から聞き取りをし「政府調査結果について」の文書を公表した。

ございます。

確かにこの証言を集めるということは非常に難しいことです。できるだけいろいろな方面からの証言というものは取っておりますけれども、それが十分かどうか、もっといろいろなことも加害者からも聞いたほうがいいのではないかというような意見があることはありますし、もっと被害者の方からも意見を聞くべきだという見方もあります。いろんな面から意見を聞きながら、そして事実を集めながら深く追求していくことが非常に大事なことだと思えます。

この前、「女性国際戦犯法廷」というのがあったのは皆さんご存じだと思います。ここにもいろんな証言が加害者の側からも出されておりました。しかしながら、こういう場合には加害者から出るということのほうが難しいという現実はあると思えます。ですから、政府側からすればあらゆる、いろいろな努力をして調査をしてこういう結論に達しましたということですから。その調査に関しては被害者からも、そして日本側からのいろいろな資料、証言というものも調査したということが重要だと思えます。饗庭先生とイー先生…。

「被害者」「加害者」と分けるから論議は紛糾

饗庭 私はこの問題自体を専門に研究していませんので、皆さんがお読みになったと聞いておりますこの本、これは韓国側ではイー先生がお訳しになって出されておる。この中で、大沼先生と和田先生の論文をお読みになれば、日本側の対処の歴史というものはわかっていただけだと思います。大変よくまとめられ、書かれております。

それはこの本に任せるとして、私の意識の問題としてひとこと申し上げますと、「加害者」、「被害者」という言葉の使い方、これがやはり大きな問題です。加害者ということ、いまのご議論のなかでの意味合いというのは、加害者は日本、被害者は朝鮮、かつてのですね、そういう使い方だと思うんですが、例えば、日本側の学生が話されたあのコンテキストの中で、例えば、「従軍慰安婦」を実際に募集した直接の関係者には当時の朝鮮の業者もいた。しかし、ある意味では加害者ですね。その人たちの証言というのはまったく取れないわけです。誰もしゃべろうとしない。

では被害者というのは誰か、もちろん朝鮮半島から連れて行かれた女性がそうであることは間違いないんですが、その時代における被害者というものは決して朝鮮半島に限らず日本の女性たちでもあったわけで、その加害者・被害者という単純な分け方で、事を切ろうとしたところにもこの問題が両国の内部で紛糾した部分があると。だいたいこのテーマそのものが、これは1980年代まではなかなか口でできなかった問題だということ。私の世代の人間からすると、1960年代からもう社会的にはこの問題が出てきておりました。

私が最初に読んだのは千田（夏光）さんの『8万人の女性の告発』という、これは日本でも韓国でもこの問題が意識化されないときに女性たちの告発として描き出したものです。そのあたりから考えますとこの加害者、被害者という問題はそれ自体非常に大きな意味というか、問題をもっているというような感じを、大きな「慰安婦」問題の流れとは別に、これはこの本で確認していただきたいんですが、私の個人的なコメントとして申し上げます。

イー・ウォヌン いま提起された問題について簡単に申し上げて、若干誤解がある部分についてもあわせて私のほうから解明したいと思います。

まず証拠、事実という問題ですけれども、すでに日本政府がこの問題について公式な調査を行い、村山総理が、過去、韓国の国民に対して「慰安婦」問題が存在し、「慰安婦」を強要する過程で強制性があったということを公式に韓国に国民に発表したことがあります。みなさんもよくご存じのように、日本政府のそうした発表というのは非常に重要なことで、皆さんが考えるよりもさまざまな準備、そういったものを重ねて具体化したあとに出てきた結果であるということをお知らせすることができると思います。

証言という問題ですけれども、人権の問題を調査するにあたって重要なことは、まず被害者、当事者の証言であります。先ほど先生からもお話がありましたけれども、この問題が単純に被害者と加害者の問題ではないということは間違いありませんけれども、法的な問題としてみる場合には、やはり被害者の証言というものが人権問題においては最も重要であるということをお知らせされますし、「慰安婦」の問題に関連して多くのそれ以外の補充資料というものがああります。当時の日本の軍隊が発行した物、さまざま

まなデータ、また米軍が持っている捕虜に対する尋問資料、慰安所の写真。そういったものを加えると事実関係については、ある程度すでに整理がされていると申し上げることができると思います。

もう1つのポイントは、なぜ韓国人がこの「慰安婦」問題を、あるいは歴史問題に言及するのか。もう過ぎ去ったことではないのかと、そういう見方が日本にあるということを私も存じております。これについて2つの点について申し上げたいと思います。

1つは、日本と韓国との関係は対等な関係ではないということです。これをまず認めなければいけません。被害者と加害者の関係ではなく、強大国と弱小国の関係だということです。日本は韓国と比べて人口で3倍、また過去の歴史を振り返っても、実際に朝鮮半島を2度にもわたって占領したことがある。そうした歴史的な事実があるので、韓国人たちは日本人に対して恐れをもって見ているということですね。そういった見方のなかで歴史の問題について、韓国人たちはより感情的な対応をすることになるということです。これで日本がもう少し大きな心で、広い心で強大国としての見方で見る必要があると思います。

アジア・世界の目、人権の目でみる

2つめのポイントは、韓国と日本だけの問題ではないということです。韓国人もかつてベトナム戦争に出かけて行って悪いことをいろいろやってきたわけです。しかし、これまでは韓国の男性たちはこの問題について一切の謝罪をしていない。ベトナムに行けば韓国の男性が、韓国の軍人が残してきた多くの孤児がいまもそこに生きている。ベトナムの女性とのあいだで子どもをつくって、無責任ですね。子どもをつくって韓国にそのまま帰ってきて、その後子どもたちの面倒を一切みていない。こういった問題についても韓国の女性団体は問題を提起しているわけですがけれども、この問題は韓国と日本だけの問題ではなく、アジア全体、あるいはこの世界全体を巻き込む大きな目でみる必要があるということです。

言い換えれば女性の人権、あるいはただの人権と言ってもいいと思います。こういった視点から見ると、この問題は、日本の軍人が犯した過ち、被害者と加害者の問題、そういったことではなくて、よりよい世界をつく

り上げていくための今後の未来の世代に残された教訓である。韓国の男性も無関係ではないのですね。先ほどお話があったように、日本の軍隊の周辺には韓国の男性も多く含まれていたわけですね。韓国の男性が100万人以上*も軍隊と軍隊に関連する仕事についていたわけですから、慰安所を訪ねた男性のなかに韓国人の男性がいなかったか、それはわからないわけですね。そういったことで新たな見方、姿勢というのが私は必要だと思います。

司会（韓国）「慰安婦」に関する資料について詳しくお話がありました。ありがとうございました。

饗庭 いまのイー先生のお話をうかがって、私は大変感激しました。同じことを私が言ったらば、たぶん韓国の人は言い逃れだとお感じになったのではないかと思います。私が、これまで何十年か日韓問題に関わってきましたけれども、こういう問題を「広い目で見よう」「歴史的に見よう」「人間史として見よう」というようなことを言い出すと、大変に反撃された経験が現にございます。そういう意味で、イー先生のようなご意見を韓国側から出していただけるようになったということに私は大変感激しております。ありがとうございました。

司会（韓国）お三方、ありがとうございました。これについて韓国側の学生のほうから何かご意見があれば、よろしく願いいたします。

韓国の学生 アドバイザーの先生方、ありがとうございました。先ほど日本の学生の発言に対して、私のほうから反問というふうになるかどうかわかりませんが、私の考えを申し上げます。

総理の「謝罪」発言と、どうして矛盾？

イー・ウォヌン先生のほうからもお話があったように、村山富市首相が、当時ですね、こうしたことを言いました。戦争の傷跡はまだ深く、「従軍慰安婦」問題は日本軍の関与によって多くの女性の名誉と身体に傷を残した。弁明の余地がないと。「従軍慰安婦」として精神的・肉体的傷を負った人たちに深く謝罪をするという発言をしたんですね。これだけではなく多くの日本側の代表者たちが公式の場でこうした謝罪の発言を繰り返してきたわけです。

* 植民地・朝鮮からの戦時動員

軍人・軍属は24万3992人（戦死・不明2万2182人）＝1993、厚生省（鉾山、軍需工場など労務動員は別。軍・労務関係の名簿は韓国に伝達）

これについて確実な証拠がない、被害者だけの証言である、こういった言い方については、何か矛盾するのではないかというふうに思います。日本側のほうから認めたのでこうした発言があったと思うのですけれども。

このほかにも日本側のほうからはさまざまな意見——謝罪のほかにも、慰安所設置あるいは運営についての日本軍の行為に対する責任を否認をしていることもあるのですけれども、これについては日本側の学生の皆さんはどのようにお考えになるのか、おうかがいしたいというふうに思います。
司会(日本) いま日本側の学生に質問があったかと思いますが、どなたか意見はございませんか？

先ほどアドバイザーの先生からお話があったように、午前中のセッションではどちらかというと被害者・加害者といった区分けよりも、女性としての人権を包括的に見ると問題がどう見えてくるかという話し合いをしたと思います。そのような観点からでもこの問題の参考になると思うので、どなたかご意見ある方いらっしゃいませんか？

日本の学生 「包括的な」という言葉が出ましたけれど、先ほどの一番初めの質問にもちょっと関わるのですけれども、私も今回のこのフォーラムに参加するまでは「慰安婦」のことを詳しくは知らなくて、テレビ報道で韓国の「慰安婦」の被害者の方たち、被害者かどうかわかりませんが、そういうことがあった「慰安婦」だった方々が大きい声でいろいろ言っているという映像のイメージしかなかったんですが、これを読んでいろいろ、ああこんなこともやっていたんだとか、あと首相が謝ったり手紙を出したことで喜んだりといった表現だったか、そういったことが本の中にあったと思うんです。

あともう1つ、本の中で五十嵐元内閣官房長官の発言で「包括的なものにこだわると結局何もできない」というのもあったと思うんです。結局、さっきの被害者・加害者の話にあったように、誰が被害者か加害者かというのは、戦争のときは結局男性は命を張って戦場に行くわけですし、別に肯定するわけではないんですが、被害者は「慰安婦」だけじゃないわけですよ。テレビだけを観ていると「慰安婦」の問題にだけ焦点があてられているように見えていて、でも報道のなかではただただ批判しているというのか、そういった首相が謝ったとか、手紙を出したとかということをあん

まり私はちょっととらえきれなかったので、今回これを見て政府もいろいろ考えているんだなと思ったりしました。結局、その1つのことでなくアジア全体で考えようとか、「慰安婦」の問題だけじゃなくて全体的な問題としてとらえようということを、私は提案したいなと思います。

司会（韓国） では、韓国の学生のなかで補足する人、あるいは発言したい人いませんか？

韓国の学生 まず午前中の討論でも出た話ですけれども、韓国の学生は戦争を経験していないのになぜ「日本帝国主義」という言葉をつかうのかと、日本の学生に質問されました。日本について何か特別な歴史教育を受けているかのように日本の人たちは考えているようです。

韓国もやはり入試中心の教育なんです。ですから、この「慰安婦」問題とかこういった問題だけ絞って特別な教育を受けているとか、日本が悪いからどうしようとか、そういう教育は受けていません。韓国も日本と同じなんです。教科書の中に、ただこういったことがあった、事実があったということをおさらいするだけなんです。でも韓国では、私たちは、こういったことがあったということを知ってはいます。しかし、日本の学生はそういった事実すら知らないところに問題があるのではないのでしょうか。

また「従軍慰安婦」の女性の方々の問題。これがなぜあれだけ大きな問題になったのか、私の考えを述べたいと思います。

植民地で生きた人たちから聞き知っている私たち

まず1980年代以降、女性の人権という問題が台頭しました。それまでは韓国国内におきましても「慰安婦」の女性たちに対し何らかの補償をするという視点がありませんでした。私もそういったことをまったく考えたこともありませんでした。しかし「慰安婦」問題が台頭し、ドキュメンタリーとかいろんな本が出版されました。そこで韓国の人たちもようやくその問題について深く知り、あるいは認識するようになりました。つまり女性、そして第二次世界大戦の時の問題として「従軍慰安婦」の問題が取り上げられることになりました。

韓国は中国の支配を受けたこともあります。しかし、中国の支配を受け

ていたときよりもなぜ日本から支配を受けたときを重視しているのか。それはやはりいまから50年前のことだからです。そして直接その被害者の人たち、その経験をした人たちがいま生きているということ。そのおじいさん、おばあさんたちがいまも生きている。彼らの経験がいまも語り継がれている。ですから、私たち若い人たちはもう少し肌でもってそういった話を知ることができるのです。

先ほどアドバイザーの人もおっしゃいましたけれども、韓国は植民地を経験したことで、日本に比べるとややもすれば感情的に流れる傾向があるかもしれません。あるいはもう少し深く認識できるきっかけになったかもしれません。しかし日本の多くの学生が、自分たちは大学に入って、そして本を通じてこういった問題について知ることになったとおっしゃっていましたよね？ そういった大学生になってマスコミなどを通じて知るよりは、やはりそれ以前に教科書などを通じて事実として知る、そして認めるべきことは認める、そして未来について一歩でも進めるような視点をもつ、そういったことが大事だと思うんです。

日本の政府が謝罪文を発表しました。そして法的には、例えば補償は済んでいるといったことも、私も本とかマスコミを通じて知ることになりました。そしてこういった事実が、韓国のマスコミにあまり取り上げられていないということが私は残念に思います。ありがとうございました。

司会(韓国) 韓国と日本の学生のこれまでの意見について、日本側からでも結構ですし、韓国側でも結構です。ご意見ある方はおっしゃってください。

日本の学生 政府の見解と国民の認識がどう違っているのかという質問だった私は思ったんですけど、それについて私も同じように思います。日本人の私でも、どうして政府の見解の、村山富市首相の見解としてああいうふうに「慰安婦」問題を認める発言がある一方で、国民の中からやはりまだ「慰安婦」の存在を全否定する人や、もちろん認める人とかさまざまな意見があると思うんですけど、どうしてそういうかい離があるのかなというのは私自身もすごく感じています。大学の授業でシンポジウムみたいなことをしたときに、そのときは「沖縄戦と朝鮮」というテーマで私はそれを大学の授業で発表しました。

政府の動きも、事実も知らない日本の学生

その内容に対する意見として「日本政府は反省していない。日本政府は補償、賠償をしていない」と、1人の意見ではあったんですけどもありました。そこには日本社会という、日本政府が戦争を遂行したという印象がすごく強くて、日本社会全体が、少なくとも人それぞれによって関与のしかた等は違ったにしても、部分的にも全関与にしても、いろんな面でこういう「慰安婦」問題に関しても、日本社会が関わっていたことなんだという認識がとても薄いなと思いました。その同じ授業内の人で、「慰安婦」問題に関しても大学で初めて知ったという人もいました。

先ほど「慰安婦」問題に関して、日本の学生が無関心とか、知識のなさがこういう日本政府と国民の意識の乖離を生んでいるのではないかとおっしゃっていたんですけども、私も同じように感じています。私は高校の時に教科書で「慰安婦」問題というのは習ったんですけども、教科書を読んでも覚えてない人もたくさんいるでしょう。やはり日本の学生の、こういう問題に対する無関心さを同時に考えていかなければならない。そういう無関心さは、やはり政府と国民の意見の違いというのに原因があるのではないかなと私は思いました。

司会（韓国）では、ほかの方いらっしゃいますか？

日本の学生 授業でも取り上げてないというのもあるんですけども、僕自身も小学校、中学校、高校と教科書にはたとえそういうのが載っていたとしても、授業中に先生から教わったということは一度もないし、マスコミは、非常に皆さんも強い力を持っているというのは非常にご理解されているとも思うんですけども、例えば日本では朝日新聞と産経新聞がよく比較されているように、完全に新聞によって意見がまったく分かれていたりする。ふつう皆さんも家庭で取ってらっしゃると思うんですけども、新聞を全紙読んでいる方というと、ほとんどいないと思うんですよ。

そういう事実があるにもかかわらず、新聞がその新聞社の見解で書かれているという事実があって、私たちはどうしても読んでいる新聞によって考えてしまうという事実には、僕はすごい疑問を感じています。僕自身もマスコミ志望でいま勉強しているんですけども、全体論として日本はこういうふうを考えているというのではなくて、その新聞社の風土でこう

いうふうな見解が書かれているということに、日本人が影響されていることに、ますます疑問を感じているところです。以上です。

日本の学生 韓国側の学生の方々の意見を聞いてみると、非常に意外に冷静で、とても建設的な意見を述べているなあと感じました。

問題だと思うのは日本側があまり知識がないこと。自分は高校の時に先生から「従軍慰安婦」問題についてよく勉強を、指導を受けたんですが、日本側は一般的におそらく知識がない。一方でマスコミの報道によって、韓国において、例えば反日デモであるとか8月15日のいわゆる日本の首相の靖国参拝とか、そういうことに関して韓国側の反発というのがよく報道されるんです。マスコミだけの情報を見ていると非常にセンセーショナルなものを取り上げがちである。そのため韓国＝反日と思いがちなんですが、実際は皆さんがおっしゃるように、非常に建設的で冷静である。そして必ずしも反日ではないし親日的な学生さんもたくさんいらっしゃる。なのに日本側が情報を受け取るツールがマスコミに偏りがちである。学校における教育においては暗記中心で、いわゆる物事の本質に迫るような教育を受けていないために、むしろものを考える素材としてはマスコミに頼りがちである。そのために皆韓国に対するイメージが偏りがちになっている。そういうふうに感じました。

マスコミのセンセーショナルな報道だけを見て韓国に対するイメージを決めてしまいがちなので、日本側は韓国が日本のことを嫌いなんじゃないかと思って反発してしまう。そういう感情があると思います。そういう根拠のない反発の感情というのが非常に「従軍慰安婦」問題に関して日本側が素直な対応がとれない。本来冷静に考えてみれば「従軍慰安婦」問題が、事実認定の問題がいろいろといわれているとはいえ、もうあるということで考えれば、韓国側に対して心からの謝罪を示す以外に、われわれとしては、ふつうに考えてそれがまっとうな対応だと思います。で、そういう素直な対応をとりづらくしているのが、日本側の韓国に対する間違った先入観から来る反発ではないかと考えます。

司会（韓国） いまのご意見に対して補足はありますか？

日本の学生 私はいままじ感動しております。それは先ほどの私のような意見をこういう場で述べてしまうと、私はごうごうたる非難を受けるので

はないかと感じておりました。主に韓国側の学生から次々と手が上がって私に非難の声が寄せられるのではないかと非常に萎縮しておりましたけれども、先ほどのイー先生の話聞いた限りでも自国の闇の部分、犯罪的な部分というものを自らがおっしゃるという姿勢を韓国側も持っていることを知って、非常に感動しております。だからきょう日本にやってきた君たち韓国人の皆さまは非常に客観的見地から物事を見ることができています。

それで、日本政府は1993年だったかな？ 「従軍慰安婦」問題を認めるという発言をしたのは事実です。しかし、私はその根拠も疑ってみることにしました。その根拠とされたのが韓国側から出された証言集、それから日本の政府側の人間が韓国に行って、元「慰安婦」だったという人たちからのヒアリングを基にしたもの*ということがわかりました。ここでもまた証言というものがでてくるわけなんですけれども、証言というものにそれほど価値をおくのは危険だと私は思わざるを得ないのです。それは何十年も経っているうちに、勘違いや、中にはこういうことは述べたくないんですけれども、嘘をついている人たちもいるかもしれません。強制連行されたかもしれないけど、連行したのは本当に日本人なのか。勘違いではないのか。それは証言から決してとらえられるべきものではないと私は考えております。そもそも、日本側が出した声明による根拠というものが非常に疑わしいものと私は感じました。

一つ韓国の学生に質問したいんですけれども、慰安所というものの存在に関してどうとらえているかを、ちょっと聞いてみたいんです。

司会（韓国） 韓国側、どなたかお答えいただけますか？

韓国の学生 まず、いまの方のお話を聞いていると、日本の皆さんは韓国の歴史をこんなふうに見ているんだなと改めて感じました。証拠が不足しているというお話ですけれども、「慰安婦」がいまおそらく20万人ほどいると推定されています。それがすべてではなく、自らの女性としての羞恥心からまだ名乗り出ない方、亡くなった方、いろいろいらっしやいますのもっと多くの方がいらっしやる。そういった方々が記憶が曖昧だとか嘘をついているだとか、皆さんがそういったことを言っているとは思えないわけですね。

* 政府の調査・ヒアリング

1993年7月、政府（総理府）は韓国・ソウルで元「慰安婦」十数人から聴取。その他多数の聞き取り、政府資料、民間資料等を調査し、同年8月、官房長官談話を出した。（53ページの注）

また韓国だけではなくて、韓国だけでこういったことがあるとしたらば、いろんなことも言えるかもしれませんが、皆さんご存じのように中国、台湾、フィリピンの女性たちが、第二次世界大戦当時日本の軍によってそういった行為をされていたということ、お話の最近の本、資料をご覧なればそういったことが本当にあったというふうに分かると思いますし、また慰安所についてどのように考えるかということですが、それについてお話し申し上げると、韓国の女性として愛国心、そういった次元から、当然それに対しては憤りを感じるわけですね。お私のおばあさん、おかあさん、また妹がもしそういった目にあったとしたらどう思うか。どう思うのでしょうか？ 私が思うとき、私自身、私の遠い親戚、そういった人がもしそうなったとしても非常に心を痛めるでしょうし、民族的な次元を超えてですね、女性としてそういった目に遭ったと考える。同じ女性として考えてください。日本の女性もその点についても共感していただけるとと思います。

日韓に限定したり対立的にでなく、普遍性と広い視点で

こうした問題は単なる韓国と日本の問題ではなくて、いま現在東南アジアの女性たちがどれほど性的な被害を受けているか、ロシアの女性たち、売春、麻薬、そういったことで全世界的に東南アジアの女性の問題が表面化している。こういった問題についてももう一度考えてみるべきだというふうにと私は思います。答えになったかどうかわかりませんが。

韓国の学生 歴史の問題を語る時、暗くなる傾向があるんですけども、もうちょっと活発的に討論したいと思っております。私の考えですけども、「従軍慰安婦」問題というのは詳しくは知らないですけども、日韓問題では私はないと考えます。先生がさっきおっしゃったけども、それはどうということかという、普遍性をもっている観点からみたほうがいいと思いますね。韓国女性だけの話ではない。または日本側だけの話ではない。さっきのフィリピンの女性とか、そういうちょっと広い観点からみる必要がある。私が言いたいのは、いまちょうどこういう話が出ているのはすごい正しいし、いいことだと思うんですけども、彼女らは1人ずついま亡くなっているんですね。

われわれのために何かやるってということより、彼女らが死ぬ前にわれわ

れに何ができるか、それを考えなければならない。アジア女性基金もできたということは、ある程度日本の社会の中で「従軍慰安婦」問題を認めている、そういう存在をわかっているということになる。ですから、やっぱりもうちょっと方法論的に、われわれには何がやることができるか、何をやるべきか、それを考えないとダメだと思うんですね。例えば補償金が十分なのか、十分に謝ったり、直接対象者に対して十分に慰めることができたか。そういうことを考える際にどういうことができるか、それをもうちょっと積極的に話し合わないといけないと思います。それができないと何も進まないし、これはやはり日韓関係のなかでの国と国との外交的な観点からとらえると、やっぱり対立になってしまうから、もうちょっと幅広くですね、普遍性に基づいて語ったほうがよいと思います。以上です。

司会 (韓国) ありがとうございます。ではもう少し、普遍性に基づいて前向きに、いままでの話も十分に前向きだったと思うんですが、例えば被害者個人に対して、被害者というか元「従軍慰安婦」の方々に対して私たちが何ができるのか、何をすべきなのか、何が足りなかったのか、こういった視点からもう一度話し合いを始めたいと思います。どなたかございませんか？

日本の学生 この「慰安婦」の問題というと、わりと日本と韓国という国と国との問題としてとらえられがちなんですけど、国と国とのあいだで例えばこういう補償をしようと思ったとしても、政府が「慰安婦」の方に対して心から謝るではないですけど、そういうことをしているということにならないと思うんですね。国と国とに関係だと。だからやっぱり私たちみたいに1人1人が自分はこのふうにするから、こういう行動をしようって思うことが大切だと思うので、例えばこの女性のためのアジア基金のようにやっぱり民間でやっていくことが大切だと思います。国と国との関係でやっても、日本と決められているなかにもいろんな日本人がいるわけだから、個人個人でやっていかなきゃいけないなと思います。

韓国の学生 韓国のほうはですね、やっぱり「従軍慰安婦」問題は私が知っている限り、国からの世論づくりというより、市民団体、または民間レベルからの世論が形成されて始まったということは、私はもう知っていますけれども、日本のほうからはややそれが足りないんじゃないかと。やっぱり

個人としての「従軍慰安婦」問題に関する認識が足りないんじゃないかと、国がやっておるそればかり従うんじゃないかという印象です。そういうことがやっぱり個人としての「従軍慰安婦」認識をどう思っていることが、最初の一段階として考えられるのではないかと思います。

日本の学生 先ほどのお話のなかで、どうすればかつて「慰安婦」だった方々に心からのお詫びをできるか、彼らの老後を安泰なものにできるかというような方法論としての問題を提示されましたが、それに関しては方法論をここで述べるよりは、むしろ、方法論というのはいわゆる、われわれいろんなお詫びについて携わっている方々いろいろ知恵を出し合って最善の策を呈すればよいと思います。それよりは、僕らが、われわれ新しい世代が、これからそういった方々が亡くなられても、その後こういった歴史における悲しい事実をどう受け止めて将来に繋げていくかということが重要だと思います。

日・韓、加害・被害でなく認識の共有を

イー先生が先ほどおっしゃったように、この問題が日韓両国の問題だけではないということが重要だと思います。われわれは「慰安婦」問題について語るとき、日本側は常に加害者で、韓国側は常に被害者というような立場の区分けをしてしまっただけでは、この問題についての本質は見えないと思います。というのは、われわれが加害者であり、韓国側が被害者であるから、ゆえにそれぞれナショナリスティックな反発の感情や、相手への抗議の感情というようなものによって人間的な解決のしかた、認識のしかたを阻害しているように感じます。

というよりは、この問題が全人類共通の問題として認識し、相互が同じようなこの罪に対して、今後世界のどこかで発生するかもしれないこのような問題に対して、共通の認識をもって対処できるような認識を共有することが大事だと思います。この問題を相手と、日本と韓国の国家間の問題にするのではなく、例えば私の、私は男性ですが、友人がそういうような被害に遭うかもしれないというようなもっと身近な感覚をもってこの問題を認識することが重要だと思います。

司会(韓国) ありがとうございます。それでは韓国側の学生のほうから何か補足意見がありましたら、よろしくお願ひします。

韓国の学生 私はまずイー先生のほうからお話のあった慰安所についてももう少し補充発言をしたいと思ひます。

韓国にも米軍が駐屯しておりまして、どこでも軍隊がおかれている場所には、基地村ですとかそういう関係した場所が形成されるんですが、そういったところでは自発的にはお金のために、いろいろは、そういったところで働く女性もいるわけです。けれども、自発的ではなく、強制力をもって、工場で労働するために行ったのに実際に行ってみたら「慰安婦」だった。自分も知らないうちに慰安所に拉致されるようなかたちで、自分が好きな時間に仕事ができるのではなくて、強制的に監禁され虐待されて働かされた。人権的な問題、強制だったためにいろいろな問題が生じたということだと思ひます。

朝もお話がありましたけれども、国際法上日本はすでに韓国に対して補償したと言っていますけれども、しかしアジア地域のさまざまなNGOは、そうした立場というものは日本側から公式に謝罪を受けていないし、アジア女性基金が支援金をつくって支給をしようとしているけれども、アジアのNGO全体ではそれを拒否して、支援金を受け取らない立場ですね。支援金を受け取ると女性らが国内で、国内NGOあるいは国内政府からの支援金を得られないので、実質的にはそのお金を受け取れないようになっているのです。実際にそうした「慰安婦」だった女性たちは非常に病気だったり貧しかったり、さびしかったり孤独であったり、そういった状況におかれていて、そのお金が確かに助けになるにもかかわらず、実際にはそういった理由によって受け取れずにいる。

ほかにも政治的な理由、あるいはNGOの立場から日本政府は公式に謝罪をしなさいと言っていますけれども、なぜ政府は謝罪の要求を受け入れないのか、日本側の学生のほうから、もし説明をしていただければと思ひますけれども、ぜひお願ひいたします。

司会(韓国) では、日本側、お願ひできますか？

日本の学生 私たちは当時戦争があった時代に生きてはいなかった、生まれていなかった。だからその時代のことを私たちが判断しようとするなら、

やっぱり信憑性のある資料からしか見ることはできないんです。信憑性のある資料というものを考えてみると、中央大学の吉見（義明）先生が「従軍慰安婦」問題に関する資料集を出しております。その中に興味深い記述がいろいろあります。そもそもなんで慰安所というものができたのかということに関して、日本軍が当時作戦を行っているときに、現地住民をレイプするという事件が多発しました。日本軍としてはこれを厳しく処罰してなかには死刑になった人もいるんですけども、それでもそういうものが収まらなかったの、そこでどうしようかという話になりました。すると性欲のはけ口を、お金で何とかさせてくれる人っていうものを置こうという話になったわけですね。

これはいま韓国に存在する売春のためのそういう施設、それと同じ物です。当時は売春が違法ではなかった時代で、日本でも韓国でもふつうの状態、戦争が起こってない状態でも存在したわけで、そのようなものを軍が管理して置こうという話になったわけですね。それで実際に「慰安婦」の募集をしたのは実は日本軍ではなくて、日本軍は業者に依頼した。ところが当時は戦争で混乱している時代ですから、非常に悪質な業者がいたわけです。するとその業者のなかで、先ほど強制という言葉が出ましたけれど、強制的に人さらいまがいに人を集めている業者がいる。日本軍はその事実を知ったので、それを厳しく取り締まるように命令したという命令書がその吉見先生の資料集にあるわけです。

そういったことも考えると、本当に強制連行したのは日本軍かというのは非常に怪しいということになってしまうわけなんです。しかしその私としては、レイプとか性犯罪に関しては非常に厳しく処罰すべきだと思いますし、去勢も辞さないくらいに思っております。私は憎むべき犯罪だと思っております。

司会（韓国） すみません。先ほどの韓国側からの質問の内容が、アジア女性基金の償い事業、償い金がなぜ元「従軍慰安婦」の方に受け取られなかったのかというのが第1点。第2点目は公的謝罪の有無について、日本側の方から聞きたいということだったので、そのご質問にまず答えてくださるという方、日本側どなたかいらっしゃいませんか？

日本の学生 日本国側からの謝罪の有無についてですが、これはもういま

もずっと話し合われているとおり、証拠があったかないか、政府が調査を依頼した学者であったり知識人だったり、その調査を受けた学者であったり知識人であったり…がおたがい対立する意見をもっている。そういった部分からなかなか1つの答えを出すというのができないというのがあって、謝罪の言葉は、調査をしてすぐ出せるわけではないというのが実はあると思うんです。

そんな中で、日本が1993年に韓国側に謝罪をしたことは画期的なことだと思うんです。その調査についても反対側の意見を一蹴できるだけのものではない。ただ主張によつての事実確認であったということは、やっぱり謝罪を出せる・出せない、する・しないっていう部分にかかってくると思うんですよ。補償金と言いかたでいいかどうか、償いのお金を受け取る・受け取らないということに関しても、先ほどあちらの韓国の方から、そのお金は十分かどうかというお話が出たんですけども、このお金が十分かどうかという観念をもつということ、ちょっと危険なことだと思うんです。

例えば、民族的にも許せないことだと思うのであれば、その金額によつてそれが納得できるものではないと思う。補償金がいくらもらえたから、このことは納得できるという問題ではなくて、もちろんそんなお金の問題じゃないと思って受け取らない人もいると思うんですけど、そういうことに関して補償金が十分かどうかという話しをするのは、ちょっと危険だなと思いました。

司会（日本） ほかに日本側の方からご意見は？

日本の学生 先ほどの1点、2点に関して言うと、アジア女性基金のホームページを見ますと、1人当たり200万円の「補償金」（償い金）と首相の手紙ですよね、こういう感じで一応謝罪というかたちではなされておると私は思っています。その1点目はその補償金に関しても163名ですか？確かにアジア女性基金の報告書による高崎先生の論文とかでもですね、これも5万人から7万人の「慰安婦」がいたといわれていますが、それに関しても「慰安婦」というのはどういうものであるかと考えてみますと、確かに強制的なものでそうならざるを得なかった方に対しては韓国政府が認定して今回163名に200万円ですか、渡ったことでとりあえずの決着がついていると思う。とりあえず国家間においては個人の請求権は残っていると

はいえ、一応国家間の賠償問題は解消済みなわけですね。本来であれば個人的なこういうものに払う必要がないと言ってしまふのもちょっときついですけど、国際法的に考えてみると、こういうことはする必要はないんですよね。

ほんとうの謝罪、解決とはなにか

そういう状況で日本政府はきちんと調査をして、向こうの政府から認定を受けた強制的に「慰安婦」にさせられた人に対して、ちゃんとお金を払っている。こういう姿勢を見ますと、ある程度、かなり日本は自分の非を認めて責任をとっているんじゃないか。私もゼミで、同じゼミに韓国の人がいらっしゃいまして、いろいろ建設的な議論もしているわけです。韓国の方はいつも「心からの謝罪を」と言うんですが、それはどういう謝罪なのかというのは私はよくわからなくてですね、手紙を見ましても日本語的な言い回しでいろいろ言っていることはあると思うんですが、この小泉首相の文面を見ても、「心からのお詫びと反省の気持ちを申し上げます」と総理大臣が言っているわけなんです。歴代の人も言っているわけであって、私は、この問題はある程度決着ついたと思うんです。

したがって、そういうことを考えるよりも、現在起きている女性に対する人権の蹂躪状況、いわゆる昔「慰安婦」になった人に対してですね、こういう話をする事自体がその人たちのセカンドレイプにつながるんじゃないかという気持ちもあるわけです。実際、アフリカとかでは、この前テレビでやっていましたけれども、女子中学生が反政府勢力に連れ去られて、売春的行為をさせられているとか、そういう話は枚挙に暇がないわけですが、そういった点にですね、もうちょっとわれわれは女性の視点で人権を見ていくべきなのではないかと私は思うわけです。

司会(日本) 政府の補償、個人の請求権についていま触れられたんですけど、韓国側、あるいは日本側から反対意見というのはありますか？

韓国の学生 「心からの謝罪」といういまの話に関連して申し上げたいと思います。

先ほど国家レベルの賠償が終わった。だから個人レベルで補償を必ずする義務はないんだと話をされました。アジア女性基金は国家レベルではな

くて、道義的な観点から人間として民間レベルでこの賠償、償いを行っている
と認識しています。人間としての道理を果たそうとしていらっしゃるの
だと思います。

また「心からの謝罪」という問題。私、思いますに、韓国のほうで言っ
ている、韓国の政府が言っている、あるいは被害者当事者が言っている謝罪
は何なんだろうか。200万円、そして総理のお手紙、それを手にしたとき
に、もちろんそれで十分とも言えるでしょう。しかし、そんなに大きな金
額ではありません。だから金額の多寡の問題じゃなくて、謝罪の問題なん
ですけども、私自身、日本側がそういった謝罪のお手紙を添えたことも
知りませんでした。日本の国民の皆さんも知らない方が多いと聞きました。
日本の国民は「慰安婦」の問題すら知らないのに、謝罪文を送ったという
ことは知らなくて当然かもしれません。ですから、日本が謝罪を行ったと
いう、そういうことを踏まえて正式に、公式にやはり謝罪をすべきだと思
うんです。誰も知らないうちに秘密裏に、個人だけに伝わるようなかたち
で手紙を送る、あるいはお金を送る。こういったアンダーグラウンド的なや
り方は望ましくないと思うんです。問題を隠蔽しようとする意図があるの
ではないかという視点もあり得ると、私は思います。

日本は公的に「慰安婦」問題を認めている

日本の学生 個人的にお金を渡すだとか、手紙を送るといったことについ
ては、この本に書かれているように、個人の方「慰安婦」の方の国内的な視
線であるとか、それを大々的に受け取ることによって国内で差別を受けてし
まうということがあるので、それに対する配慮から秘密裏にという言い方
をするかもしれないんですけども、内密に、あまり公にせずには渡したとい
うことが書かれていたと思います。

もう1つ、先ほどからの議論で私が言いたいのは、先ほど森さんとかは
証拠がどうだこうだ、あと決着がついたという話もありましたが、私自身
思うのは、決着がついたとかこれで十分だとか思うのは、その本に書かれて
いるように元「慰安婦」の方が判断すべきところだと思いますから、こち
ら側で決着がついたということに関しては、法律的にというのを気持ちと
して、道義的にというのはいえないと思います。

そして、いままでの流れとして日本は公に認めているのに国民は認めていないような流れがあったと思うんですけども、それよりも先にいままでずっと日本は認めてこなかった。それが国民の動きから日本がやっと公に認めるようになった。ただし日本の一部ではまだ認めていない意見もあるけど、私の認識としては日本国民の多くは「慰安婦」問題を認めていると思って、その誤解だけは解きたいと思います。

韓国の学生 私は先ほど男性が発言されたことに関連して申し上げます。

政治的に、日韓協定が締結されて日本政府から国家間の経済的な賠償問題は終わったというふうにおっしゃいましたけれども、私の知る限り当時は「慰安婦」問題の言及はなかったというように承知しております。1980年代以降こうした問題が台頭し、日本政府が謝罪をしたわけですけども、その協約にその問題が含まれていないというふうにも考えられるんですが。この点についてもどのようにお考えでしょうか？ 日韓協定ですね。

日本の学生 その協約というのは、当時問題が出てなかったの、問題のとりようがない。そういうこともかんがみて、今回のアジア女性基金ということを政府が事務費を運営するかたちで、ある程度支援してお金を渡しているわけで、これを見る限りまったく対応をとってないどころか、ちゃんと対応をとっているなど私は感じます。

それから、請求権ということに関して言うと、何十年後に起こったことに関して、遡及して、それ（協定）は無効だったんじゃないかって言うと、どの話も始まらなくなるので、そのことについては国家間ではとりあえず国交を結んでいま良好な関係があるわけですから、日韓協議自体が無効だったとかそういう違法性というかそういうものはあまり感じておりませんが。

司会（日本） 大変盛り上がっているところなんですけども、3時半になりましたので、まず第1セッションを終わらせて、10分間の休憩の後に3時40分からセッション2で「日韓関係の現状」について話し合いたいと思います。

「従軍慰安婦」の問題は、単に歴史の問題ではなくて現代の問題でもあるので、その点についても話し合えればと思っています。